# 言語の解釈体系としての機能

坂原　茂

## 1. 序　論

自然言語の意味作用は，多くの場合客観的，絶対的な意味作用でなく，さまざまな方法で暗黙のうちに前提された基準への言及を含むことによって成立している。黒人という表現を例にとれば，その中に含まれている「黒」という語は，絶対的な意味での黒でなく ― 現に黒人はむしろ茶褐色に近い ― 人間の色の決定基準というようなものとの関連においての黒でしかない。特に，形容詞の意味の理解においては，この暗黙の基準への言及が，決定的に重要になる。自然言語においては，「小さい」という概念を客観的な尺度によって表わすことは不可能である。

(1) 小さな象でもかなり大きい。

上の文において「小さい」という語は，象の平均的な大きさに対して使われており，「大きい」の方は，動物全体の平均的大きさを考慮して使われている。従って，比較されるものの基準が隔け離れている場合には，

(2) 非常に小さな象でも，非常に大きなアメーバーよりずっと大きい。
(3) 低い山でも，高い丘よりは高い。

というようなことが矛盾なしに言うことができる。

言語の意味の問題に，集合論の立場から接近する場合，例えば「美しい花」は「美しいもの」の集合と「花」の集合の共通部分であり，「美しい女」は「美しいもの」の集合と「女」の集合の共通部分であるというようなことが言われる（例えば，坂井秀寿『日本語の文法と論理』勁草書房，1979，p. 82）。この例を見る限り，いかにももっともらしい説明に思える。ところが，この考えは，物事の過度の単純化 ― それだけのことなら，事情に応じて必要なときもあろう ― というより，根底において誤まっている。この考えからするなら，「小さい象」は「小さいもの」

の集合と「象」の集合の共通部分であり，「小さいアメーバー」は「小さいもの」の集合と「アメーバー」の集合の共通部分になり，必然的に「小さい象」と「小さいアメーバー」の集合は，ともに「小さいもの」の集合に含まれる。同様にして，「大きい象」と「大きいアメーバー」の集合は，「大きいもの」の集合に含まれる。しかしながら，「小さいもの」の集合に含まれる「小さい象」の集合の各要素は，「大きいもの」の集合に含まれる「大きいアメーバー」のどの要素より，大きい。簡単にいうと(2)のような事態が成立する。とすると，集合の要素の性質を定義している「小さい」「大きい」などは，余程不思議な概念とならざるを得ない。この「小さいもの」の集合が物理的に測定されうるある尺度によって決定されると考えるなら ― さもなければ，集合そのものの定義が不可能になる ― この説明がいかに理不尽なものであるかは一目瞭然である。「象の小ささ」と「アメーバーの小ささ」は，客観的尺度に関しては何ら共通するところはない。実際には「小さいもの」というような唯一個の集合があるのではなく，もしそうした集合を考えるなら「小さい」が修飾する名詞の数だけ互いに異なる「小さいもの」の集合があり，自然数が無限であると考えるなら，「小さな平屋」「小さな二階屋」「小さな三階建ての家」 etc. と結局，理論上では無限にあることになる。すなわち「小ささ」は，その修飾する名詞句に相関してしか決定できず，「小さい象」という場合の「小さい」は暗黙の内に象の平均的大きさといったものに言及しており，象を考えずに決定できるようなものではなく，片方に象の平均的大きさと無関係に決定できるような「小さいもの」の集合があり，もう片方に「象」の集合があり，その共通部分であると言えるような代物ではない。したがって，「AであるB（A：形容詞，B：名詞句）」のような表現を集合論的に扱おうとするなら，Aの決定にすでにBへの言及が含まれており，二つの独立して定義できる集合に還元できず，結局循環的議論に終わらざるを得ない。

しかし「小さい」「大きい」などの関係概念が，例えば象では2m以下が小さい象で，2m以上が大きい象，そしてアメーバーでは0.1mm以下が大きいアメーバー，0.1mm以上が小さいアメーバーのようになっている言語は理論上は可能であっても，まず存在しないであろう。こうした言語では，修飾される名詞句が表わす対象の平均的大きさがわかっても，そのどちらを大きい，小さいと言うかを別個に習得しなければならなくなるわけであり，その分だけ言語の習得に余計な負担がかかる。こうした場合の決定については，言語は非常に組織的である。「美しい花」「美しい女」についても同様のことが言え，花についての美しさと，女

についての美しさは，客観的には，何ら共通する部分をもたないであろう。修飾される名詞句から独立して美しさがあると考える類の思考は，われわれが「美しさ」という語で概念化している，客観的には何ら共通したところをもたない別々の事象のうえに，われわれの概念化，別言すれば，偏見（われわれの生世界は，われわれがある立場から世界を解釈しつつ生きているような解釈の体系であるという意味）を無批判に投影して，思考上の概念化の等価と対象の等価を同一視しているだけに過ぎない。われわれが，思考上の概念化，そしてそれによって基礎付けられている言語上の概念化を事物の上に投影するのは，ある意味では自然なことであるが，概念化が組織的であることにまどわされて，対象から独立して美しさが決定できるというような考えは，やはり数多ある存在論的偏見の一つに過ぎない。人間の世界の概念化は，既に文化的，歴史的に決定づけられており，言語が異なればさまざまな度合で異なりうる。この相対性にもかかわらず，人間が，いかに自分達の概念化を物理世界に投影することにより，世界の事物の性質とその事物のある特殊な解釈体系である自分達の概念化を同一視し続けてきたか，そして，それがまた，全く普遍的とも言える自然な思考上の誤謬の一つであるかは，つとに科学史の教えるところである（例えば，Gaston Bachelard, *L'Activité rationaliste de la Physique contemporaine,* Presses Universitaires de France, 1951 *La Psychanalyse du Feu*, Gallimard, 1949 参照）. このことは暗喩の問題と関連して，後にもう一度検討する。

さて，自然言語の使用に関して，暗黙のうちに前提される基準は上の(2), (3)の例のように，ある言語にとって慣習的に定まっている場合もあれば，次の例のように，その文が使われている文脈によってのみ決定される場合もある。

(4) Le Roi: [...] Que l'on garde mon corps intact dans un palais sur un trône, que l'on m'apporte des nourritures. Que des musiciens jouent pour moi, que des vierges se roulent à mes pieds refroidis.

[...]

Juliette, à Marguerite: C'est le délire, Madame. La Garde, annonçant: Sa majesté, le Roi délire.

Marguerite : Pas encore. Il est encore trop sensé. A la fois trop et pas assez. (Eugène Ionesco, *Le Roi se meurt,* Théâtre IV, Gallimard, p. 40, 下線は坂原による）

下線をひいた部分は，そこだけを取り出してみると不可能な事態を表現している。しかしこの文脈の中では trop (sensé) の方は délire に関して使われており，pas assez (sensé) の方は一般的な事態に言及している。つまり， délire というには正気すぎるが，さりとて正気というわけでもないというのがこの文脈の中での意味であり，このように解釈された場合には表面的な矛盾はなくなる。

ある事態がああでもあり，こうでもあるというのはわれわれの日常的経験でもしょっちゅうあることであり，それはまた端的には，〝別の観点からは〟といったような表現に集約されうる事実である。すなわち，あるものに対して，ある観点からはこうであるが，別の観点からはまた別様な表現が対応するということである。多くの場合に，ある判断は，ある観点，ある基準に対してしか真でないわけであるが，自然言語では，その価値判断を明確にすることはそう頻繁には行なわない。したがって，その前提された判断の基準が見失われると，その実矛盾を含んでいない文が，わけのわからない矛盾した文になることがある。逆に大体において，人間は矛盾したことは言わないという思い込みがあるために，矛盾した解釈が可能な文に対して，概して，そうした矛盾した解釈が可能なことにさえ気付かないこともある。

(5) フランス語では，花は女性名詞である。

字面通りの解釈では，（日本語の単語である）花がフランス語では女性名詞であるということになるが，その馬鹿馬鹿しさのために，普通は， fleur はフランス語では女性名詞であるという別の整合的な解釈が採用され，矛盾した解釈がありうることは通例意識されない。要するに「フランス語では」という限定表現は，言及されうる対象をフランス語内部の語や表現に限定するが，その語または表現に言及するのに，必ずしもフランス語内部の語や表現を使わなくとも良く，この論文が日本語で書かれているという理由により， fleur の日本語での対応表現「花」を使っても同じことが言えるということである。ところが逆に，

(6) 日本語では， fleur は男性名詞でも女性名詞でもない。

という文においては，むしろ字面通りの馬鹿馬鹿しい方の解釈が前面に出てくる。なぜなら，この文が日本語であるために，「花」という日本語のありふれた単語に言及するのに，わざわざフランス語まで fleur という対応表現を探しに行くのを

正当化するに足る理由がないからである。これを (6′) のように書き改めると，そうした理由ができるので，まっとうな文になる。

(6′) En japonais, *fleur* n'est pas un nom masculin ni un nom féminin.

これはまた，地の文が日本語のときに，日本語でない単語を使うときには，話者は，その単語を使うのに十分な理由があると思っているということになる。例えば，日本語に十全に対応する表現がなかったりする場合である。 Stendhal がイタリア語が多数混入した文を書いたのは，イタリアらしさを表現する意図があったのは知られているが，これもまた，そうした事実の副次的効果を利用した例であると言えよう。

上述の例のごとく，「小さい」という語の使用は暗黙のうちに了解された基準への言及を含んでおり，また(5)においても，日本語が地の文であるという事態をふまえた上で，日本語「花」がフランス語「 fleur 」を表わすのが可能になっている。以下の章では，主として，あるものを表わすのにそれ固有の表現を使わず，何らかの形でそれに対応する表現を使用する場合のメカニズムについて，いくつかの考察を行なう。

## 2. 不透明文脈

一般にある文の真理値は，同一物を表わす表現の置き換えによっては変化を蒙らないとされている。例えば，

(1) 人間喜劇の作者
　　＝ 滑稽風流譚の作者
　　＝ ハンスカ夫人の愛人

(1)のような前提がある場合に，

(2) Balzac は人間喜劇の作者である。

(2)の中の「人間喜劇の作者」を次のように

(2′)　Balzac は滑稽風流譚の作者である。
(2″)　Balzac はハンスカ夫人の愛人である。

と，同一指示表現で置き換えても，(2)が真であれば(2′)，(2″)は真であり，仮に(2)が偽ならば(2′)，(2″)も偽になる。この事実はライプニッツの同一物識別不可能の法則と呼ばれることもある。

これに対して，ある文脈においては，同一物間の置換が真理値を変えてしまうことがある。例えば

(3)　太郎は，Balzac が人間喜劇の作者であるのを知っている。

(3)の文が真であることは，(3′)，(3″)が真であることを保証しない。

(3′)　太郎は，Balzac が滑稽風流譚の作者であるのを知っている。
(3″)　太郎は，Balzac がハンスカ夫人の愛人であるのを知っている。

「太郎は……を知っている」のように同一物同士の置換を許さない文脈は，一般に不透明な文脈と呼ばれ，それに対して，ライプニッツの法則が通用する「Balzac は……である」のような文脈は，透明な文脈と呼ばれる。不透明な文脈にはさまざまあり，理由を表わす節もその一つである。

(4)　Balzac は有名である，なぜなら人間喜劇の作者であるから。
(4′)　Balzac は有名である，なぜなら滑稽風流譚の作者であるから。
(4″)　Balzac は有名である，なぜならハンスカ夫人の愛人であるから。

たとえ(4)が真であっても，(4′)はフランス文学にある程度通じている人を除けば，そして恐らくその場合でも，疑わしいか偽であり，(4″)にいたっては，とうていまともな文とは言えない。このように，同一物指示表現が，互いに置き換えられない文脈があることは，表現の意味と指示を別のものと考える理由になる。例えば，Frege は，「意味と指示」(≪Sens et Dénotation≫, in *Ecrits logiques et*

*philosophiques*, Seuil, 1971 原論文は 1892）において，等号の意味とは何かを考えるに当たって，等号とは，意味の異なる二つの同一指示表現の間に置かれると述べている。例えば，２＋２＝２×２とは，同じ指示物（すなわち４）をもつ２つの意味の異なる表現が等しいと述べているというわけである。これが逆に，等号が２つの指示物間に置かれるものであれと考えるなら，４が４に等しいのは些細な事実であり，何ら新しい知識の獲得にならないであろう。「明けの明星」が「宵の明星」と同じ物（すなわち金星）であるのがわかったことが科学上の有意義な発見であるのも，同じ理由による。

また，さまざまな言語的文脈が余すところなく，透明な文脈に二分できると考えるのは，単純すぎるようである。

(5)　私は，昨日の夕方，金星を見た。
(5′)　私は，昨日の夕方，宵の明星を見た。
(5″)　私は，昨日の夕方，明けの明星を見た。

(5′)は何もおかしなところはないが，(5″)のように金星を明けの明星に置き換えると，その意味によってちぐはぐな文になってしまう。

Frege は，語は意味と指示物をもつと述べ，指示物はさまざまな物や事態であるとし，文は考え（pensée，意味と考えても差し支えない）と指示物をもち，文の指示物とはその真理値（真または偽）であると考えている。文の指示対象がその真理値であるというのは，一見奇妙な印象を与えるが，この考えは，形を変えながらも現代の論理学のなかに受け継がれている。また，論理学に影響をうけた意味論では，ある文の意味とは，その文が真理値をもつための条件などと言われることもある。 Frege はまた，(3)のような不透明な文脈における文の指示対象は真理値でなく意味であると考えている。この考えを理解するには， Frege の論文の目標が，言語の真理関数的処理の基礎を置くことであったのを考えねばならない。すなわち，ある種の文結合子 ― 論理学で～，∧，∨，→（それぞれ，おおまかに，「…ない」「そして」「または」「もし……ならば」に対応する）と表記される演算子 ―は，それが結合する要素文の真理値がわかれば，文の意味とは無関係に，別言すれば，それらの文が真や偽と判断される方法や理由から独立して，文全体の真理値を決定できる。ゆえに，そうした文結合子で結ばれた要素の文は，真理値を同じくするいかなる文とも交換することができる。一方，不透明な文脈に生起する文においては，

たとえ単文としては真理値が同じ文でも，意味の異なる文に置き換えるなら，文全体の真理値がもとの文の真理値と同じであるかどうかはわからない。したがって，非真理関数的文脈では，一般に，同一指示による置換は，もとの文と同じ真理値をもつとは限らないということになる。このことを Frege 流に言うならば，こうした文の指示対象は真理値でなく，その文の表わしている意味であるということになる。

Strawson (≪ De l'Acte de Référence ≫, in *Etudes de Logique et de Linguistique*, Seuil, 1971, 原題は *On referring*, 1951) は，文について次のような三つの区別を考えている。

1. タイプとしての文
2. 文の使用
3. 文の発話

それと平行して，表現についても同様の区別を行なっている。例えば，

(6) 現在のイギリス女王は美人だ。

という文は，タイプとしての文の段階では，その意味するところであり，第2段階においては，もしこの文が1981年現在発せられたものであれば，エリザベス2世についての文であり，1600年当時に発せられたものであれば，エリザベス1世についての何らかの陳述ということになる。1から2への移行にしたがって，同一の意味をもつ文が，発話された状況によって異なる指示物をもつことになり，異なる命題になっている。1の段階では，文が真であるか偽であるかを考えるのはナンセンスであり，文は2の段階になって初めて真偽が問題にされうる。第3の段階においては，例えば1981年10月14日と1981年10月15日では，同じ文が同じ命題を表わしているが，異なった発話とされるということである。この第3段階においては，行為としての文使用の側面が焦点となっている。この考えからすれば，同じ文を二度発話することはできない。続けて言ったところでそれは異なる発話になるから。

先に，「金星＝明けの明星＝宵の明星」のように，意味の異なる複数の表現が同一対象を指示することを見たが，その反対に，「現在のイギリス女王」のようにある表現 — 一つの表現だから当然同一の意味をもっている — が，使われる状況の

変化に応じて複数個の指示対象をもつことがある。固有名詞のように，ある言語表現に対してある定まった指示物が対応するのは，むしろ例外である。こうした固有名詞の使用における特殊性は時に，その質における特殊性と考えられ，固有名詞は意味をもたずに，単に指示対象をもつに過ぎないと考えられたりするが，この点については，Lévi–Strauss (*La Pensée sauvage*, Plon, 1962) は，固有名詞もやはりその根底においては分類体系であることを明らかにし，普通名詞との差異は，質的なものでなく量的なものであるとした。

### 3. 指示物の同定

言語が実際に使用される場合においては，詩のような特別な場合を除くなら，意味行為自体はその行為全体の最終目標でなく，多くの場合には，むしろ言語外の事物や事態について何らかのことを語ることが最終目標であろうと考えられる。言語の道具性は，明白な事実である。このことは，例えば，ある地点に到着するという目標に対して，歩くという行為は，外的な意味を持つだけで，車で行こうが，何か他の手段で辿り着こうが，すなわち手段の選択はどうでも良いのと似ている。これに反して舞踏では，行為そのものがまた目標でもある。このことは，言語が手段である限りは，目標との関係においてその目標を適切に達成するために，目立たないもの，透明なもの，実在性の稀薄なものになる必要があり，逆に詩においては，言語自体が，特出したもの，不透明なもの，その存在を主張するものとなっているというような反省を導くこともある。

しかしながら，言語の主たる機能は，言語自体を語ることではない。言語における意味は，言語行為の最終的目標ではなく，言語外の事物や事態への指令または合図 (instruction) である。これより，言語的または言語外的文脈が理解を保証するなら，言語行為は容易に代名詞的表現に還元されうる。このことは，語や表現に限られることではなく，言語行為の単位として，むしろ文全体の意味についてより良く当てはまる。話者が言語のしきたりに従い行う意味行為は，ある意図を成就するための一つの過程であり，意味そのものが理解されてもその意図の実現に失敗するなら，全体としては失敗も同然である。

(1) あなたは，そこの棚の上の本に手が届きますか。

というのは，意味からすれば疑問文であろうが，発話の力（force illocutoire）からすれば依頼を述べている。すなわち(1)の疑問文としての意味は，依頼を理解させるための指令である。[1] このように意味を理解することは，社会的慣習としての言語の意味を軽視することではなく，言語行為のもっている行為としての側面を明らかにすることにより，言語を他の人間の行為との相互作用のなかで理解しようとする試みにすぎない。

McCawley（≪ *Where do noun phrases come from* ? ≫, in *Grammar and Meaning*, 大修館， 1973）は，次のような文

(2) Willy said that he had seen the woman who lives at 219 Main St.

が， the woman who lives at 219 Main St. という表現に関していくつかの異なる解釈を許容することを指摘した。ある解釈では，それは，Willy 自身の使った表現であり（そのときには， Willy は次のような文を言ったことになる），

(3) I saw the woman who lives at 219 Main St.

また別の解釈では，(2)の話者が例えば，

(4) I saw Harriet Robinowitz.

という文の中の指示表現を上記のような表現に置き換えたと考えられる。この後の解釈においては，Willy は Harriet Robinowitz が Main Street の219番地に住んでいることを知らなくとも構わないわけで，現にこの解釈においては，(2)に続けて，

(5) ... but he doesn't know that she lives there.

と述べることができる。逆に最初の解釈においては，(2)に続けて，

(6) ... but the woman he had in mind really lives on Pine St.

のように述べることができる。このように報告文の中に使われている名詞句を最初のように，もともとの表現通り使っていると考える解釈は，その名詞句の de dicto の解釈といい，二番目の解釈のように別の同一指示表現に置き換えたと考える解釈を，その名詞句の de re の解釈と呼ぶ。(2)においては両解釈が可能であったが，次の文

(7) Borris says that he didn't kiss the girl who he kissed.

においては，普通 Borris が，

(8) I didn't kiss the girl who I kissed.

のような矛盾文を言うわけがないので，de re の解釈だけが可能になる。McCawley は，(2)のなかにみられる二つの解釈を区別するために，おおむね次のような異なる意味表記を考え，それがさまざまな変形を経ることによって，表層で同一文になると説明した。

(9) a $[_{S0}$(Willy)$x_1$ :$x_1$ said $[_{S_1}$(the woman who lives at 219 Main St.) $x_2$ :$x_1$ had seen $x_2$ ]] (De dicto)
b $[_{S0}$(Willy)$x_1$, (the woman who lives at 219 Main St.) $x_2$ :$x_1$ said $[_{S_1}$ $x_1$ had seen $x_2$ ]] (De re)[2)]

このことは，不透明文脈においても，その不透明さにもかかわらず，ある指示表現が，別の同一指示表現に置き換えられているということである。それ以前にも，不透明な文脈と関係なしに，Bach (≪ *Nouns and Noun phrases* ≫, in *Universals in Linguistic Theory*, ed. Bach and Harms, Holt, Reinhart and Winston, 1968 ) は，

(10) Before I met my wife, she worked in a library.

の中の my wife は，現在の状態に対して使われており — 逢う前から自分の妻というのは，西部劇での文通結婚，または日本ブラジル移民の同じような例を除いては，普通の事態ではない — その文が述べている時点での記述ではないというこ

とを指摘し，このような名詞句は，おおむね，

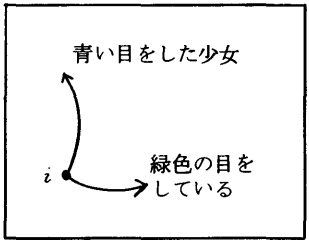
(11)　x (x is my wife now) または x who is my wife now.

という深層構造から，関係節縮約変形によって生成されると考えた。その後この問題は，Hasegawa (≪ *Transformations and Semantic Interpretation* ≫, in *Linguistic Inquiry 3*, 1972), Postal (≪ *On Certain Ambiguities* ≫, in *Linguistic Inquiry 5*, 1974), Jackendoff (≪ *On Belief-Contexts* ≫, in *Linguistic Inquiry 6*, 1975) などにより活発に論議された。この論争のひとつの争点は，文の意味と構文の同型性を主張する生成意味論 (Bach, McCawley, Postal) に対して，文の意味と構文は同型ではなく，ある構文をもった文に対しては，その意味を知るには解釈が必要であるとする解釈意味論 (Hasegawa, Jackendoff) が，それぞれの優位を主張するということであったが，この論文ではその問題については触れない。以下，いくつかの実例を観察しながら，この現象が，言語学的に何を意味するか考えてみたい。

(12)　この絵の中では，青い目をした少女が緑色の目をしている。

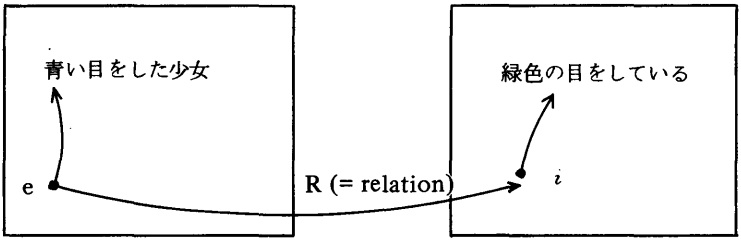
(12)においては，二つの解釈がありうる。一つは字面通りに「青＝緑」という矛盾した前提を含んだ解釈であり，別の解釈では，「青い目をした少女」とは，絵のモデル，つまり現実の少女の記述であり，表面的な矛盾は，実のところは矛盾でない。最初の解釈では，「青い目をした少女」「緑色の目をしている」もともに，絵の中の世界の記述であり，次の解釈においては「青い目をした少女」の方は現実世界[3]への言及を含んでおり，「緑色の目をしている」の方は絵の世界内部の記述である。別言すれば，ある解釈においては，すべての表現がその世界内の記述であるが，別の解釈では二つの世界での記述が併用されている。ここでは Fauconnier (*Mental Spaces, Espaces référentiels*, 共に 1980, mineographs) の説明図式により，この両方の解釈を図示してみる。

(13) a




I (= image)

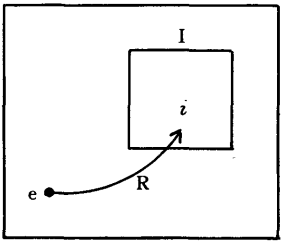
b




E (= réalité)　　I (= image)

いずれの場合においても，「ｉ（＝絵の中の像）が緑色の目をしている」ということになるが，(13 a) においては，ｉはｉ自身の属性によって記述されている（di＝青い目の少女，diとはｉの description ということ）が，(13b) においては，ｉはｉの属性によってではなく，モデルつまりｅの方の属性によって記述されている（de＝青い目をした少女）。「…の中では」という限定表現は，現実世界の中に，更に別の世界を導入している。(13b) も，E，I とも話者によって捉えられた限りでの世界であるから，話者の世界Eが，像の世界Ｉを包み込んでいることになり，正確には

(13b′)




E

のように書くべきであろうが，表記が繁雑になるので(13b)のように書くことにする。

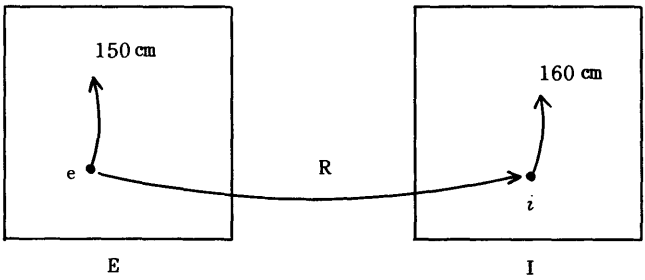
(14) 花子は実物より大きい。

というのは矛盾した文だが，

(15) 次郎は，花子が実物より大きいと思っている。

は，(14)と同じように，次郎が矛盾した考えをもっているという解釈と，(13b)のように，二つの世界に言及していると考えることによって，整合的な考えをもっているという解釈が可能である。例えば最初の場合には，次郎は花子の身長が150*cm*でかつ160*cm*であると考えている場合であり，別の解釈は，次郎は花子が160*cm*あると思っているのに，話者は150*cm*しかないと思っている場合である。この第2の解釈は次のように図示できる。

(16)




これまでの例では，二つの世界を結ぶ関係Rはそれほど重要な役割を果すことはなかったが，R自身が解釈に対して活発な役割を果すような例もある。

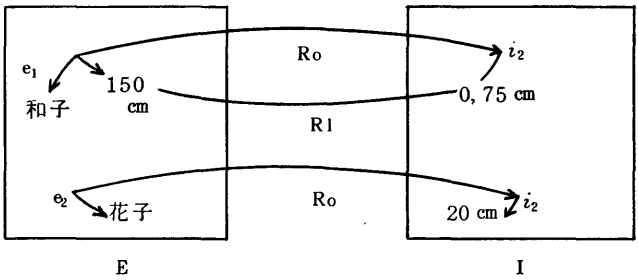
(17) この絵の中では，花子は和子より大きい。

最初の解釈では，花子，和子とも絵の中に描かれており，その像の大きさを比較している。次の解釈では花子だけが絵の中におり，和子はその中におらず，例えば花

子の肖像画の前に立っているというような場合である。この場合には，花子がその絵の中で2 $m$の大きさをもっており，一方現実の絵の外にいる和子は150$cm$というようなことが考えられる。その逆の解釈 ― 花子が絵の外にいて，和子が絵の中にいる ― は，不可能のようである。三番目の解釈に入る前に，少し，現実を像に投写する関係Rについて述べておきたい。

Iが写真である場合には，物体の大きさ，レンズからの距離などによって三次元から二次元に変わるとはいえ，Eは大体Iに忠実に投写される。しかし，これが白黒写真なら，Eにあった色はIの方では濃淡に置き代えられてしまう。このように，Eの方にあったある属性は失われたり，別の物によって置き代えられたりする一方，Eの方になかった，例えば，現象上でのボケやしみなどがIの方に加わったりすることもある。また，何か現実の物体を描くときには，写真ほどRは一定してはいなくとも，ある暗黙のしきたりに従っているのが普通である。例えば，現実で大きいものは，絵の中でも大きく描かれるといった類である。(17)の絵が，例えば，京大時計台のわきに立っている花子を除いては，みなある種の遠近法によって規則的に縮少されていると考え，この尺度を200分の1とすると，京大時計台はせいぜい10$cm$くらいに描かれるはずである。ところが花子だけが，この縮尺尺度から外れて20$cm$くらいの巨人に描いてあると考えると，20$cm$であること自体は巨人でもなんでもなく小人であるが，その縮尺尺度Rに対しては巨人ということになる。このような解釈のもとにおいて，まず和子は絵の中にいないという解釈がありうる。このときには，和子の身長が150$cm$なら，Rによってそこには描かれていない和子の身長が計算され，それは0.75$cm$となる。この解釈を図示すると次のようになる。

(18)




この図では，$R_1$ は実際にはIの中にいない和子の身長を $e_1$ の150$cm$から投写す

る関係である。したがって，この解釈のもとでは(17)は，絵の中の花子の身長（＝20 *cm*）と $R_1$ によって投写された和子の身長（＝0.75 *cm*）を比較していることになる。

第四の解釈では，和子は絵の中におり，そこで25 *cm*に描いてあるとしよう。ところが和子は花子よりずっと前景の方におり，実際の大きさが大きくとも，遠近法の約束により(17)が整合的に解釈されることになる。この解釈も，遠近法というEからＩへの関係Ｒを考慮して初めて成立する。

いくつかの述語は，まさに二つの世界の間にありうるずれの関係を意味する。「評価する」という動詞に対して，「過大評価する」「過小評価する」 (surestimer, surévaluer, sous-estimer, sous-évaluer) では，二つの評価のずれが問題になっている。「誇張する」 (exagérer) なども同様である。

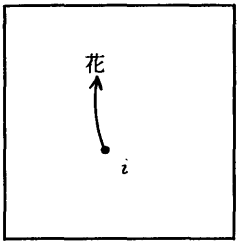
このようにいろいろな解釈を許す文に対して，それに対応する数だけの深層での意味表記を与えて，変形によって(17)のような文を派生するとするならば，その変形規則は極めてその場あたりの一般性のない規則になるのは容易に推察されよう。また，これらの意味を解釈規則によって探し出すとしても，まずその解釈規則が定式化されうるかどうか疑わしいうえに，たとえそのような規則を案出したところで，一般性を欠いた規則になり，言語学的に有意味な一般化がその規則によって述べられているとは，にわかには信じがたい。結局のところ，(17)が多義であるかどうかを考えるより，もともと一つしかない意味が，言語外的知識によって，いろいろな事態に対応されて解釈されるというのが，真実に近いのではなかろうか。

既に序論において，

(19) フランス語では，花は女性名詞である。

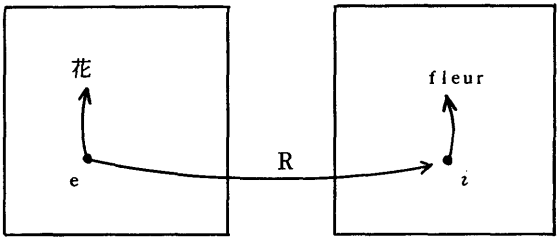
という文が，一つには頓珍漢な解釈になり，もう一つの解釈では，日本語の単語「花」がフランス語「 fleur 」を探し出す指令として使われているために整合的な解釈になりうるのを見た。二つの解釈を図示すれば次のようになる。

(20) a




I（＝フランス語）

b




E（＝日本語）　　I（＝フランス語）

ところが次の文

(21) フランス語では，柿は男性名詞である。

というのは，偶々，日本語の単語がフランス語になったために，(20a) のような解釈（このときには「柿」と書かずに「kaki」と書かねばならないのかも知れないが）をとっても，(20b) のような解釈をとっても，自然な解釈となる。

時間や地名を表わす表現も同様に像の世界を作る。

(22) 1920年には，社長は赤ん坊であった。

「社長」という指示表現が，1920年における属性を使っての記述であるとすれば，赤ん坊社長という奇妙な解釈になるが，昔の日本に子供の天皇がいたのを考えれば，有り得ないことではなく，結局のところこの奇妙さの原因は，われわれのもっている知識と相入れないためであり，言語学的事実ではない。第二の解釈では，この文の発話時点での記述ということになる（社長＝現在社長である人）。

(23) 松下電気では，社長は大法螺を吹いている。

(23)は，第一の解釈では，社長は，松下電気の社長のことであるが，第二の解釈では，松下電気以外の社員が，自社の社長が，松下電気に行くと大法螺を吹いていると言っていることになる。

英語のなぞなぞに「もし馬の尻尾を脚と呼んだら，馬は脚を何本もっているか」というのがあり，答は「4本」だそうである。ところが，その他にも「1本」「5本」と答えることが考えられる。「1本」と答えた人は，ある限定条件が導入されたときに，その条件に素直に反応して，例えば，(23)の社長が松下幸之助（実は会長であるが）を指すと考える人と同じことをしていることになる。一方「4本」と答える人は，条件が導入されても，依然その条件がなくても既に成立している事態のことを考えているわけで，(23)の例で，社長が自社の社長のことを指しているとする解釈と同じ反応であり，「5本」と答える人は，条件が導入される以前の世界と，条件が導入された後の世界の両方に反応していることになり，(23)に対して，社長とは松下電気の社長と自社の社長のどちらかと聞き返す人の反応であると言えよう。

これはまた「小さい鯨」という表現に対して，「鯨としては小さい鯨（例えば5mくらいの鯨）」と考える解釈，「鯨という限定がなくとも小さい鯨（例えば，5cmくらいの鯨）」と考える解釈，そのどちらかにわかには決めがたいと表現の両義性に思いつく解釈，の三通りがありうるのと同様である。また日本語では，「善良な医者」，「上手な医者」のように一方的に人格に関する評価か，医者としての腕の良さに関する評価かすぐにわかる表現をしているが，例えば英語の「 a good doctor 」では，これだけではどちらとも見当のつかない表現になっているという例もある。

動詞の時制または，それに対応するような表現は，(22)のように「…には」という明確な時間導入表現がない場合でも，発話の時点に対して，像の世界を導入することができる。

(24) 三郎は美貌の少女と結婚するつもりである。

第一の解釈においては，美貌の少女は結婚時点での記述と考えられる。この場合には，発話時点でのその対象物は美貌である必要はなく（これから結婚するまでに整形手術を受けるのかもしれない），同様に少女である必要もない（結婚は18年先

のことであり，現在は赤ん坊であるというようなことも考えられる）。第二の解釈においては，美貌の少女はもっぱら発話時点での記述と考えられる。この解釈においては，結婚時点では必ずしも美貌の少女という記述が当てはまらなくとも良い（例えば，結婚が50年先のことを考えよ）。次の例を見てみよう。

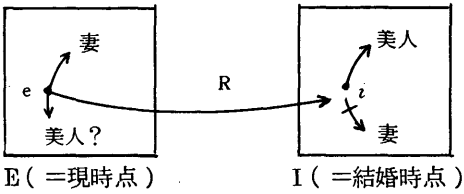
(25) 四郎は美人の妻と結婚した。

妻というのは，ある関係によって人間を指す語なので，(25)の中でもさまざまに解釈されうる。第一の解釈によれば，妻とは他人の妻であり，四郎は美人の他人の妻と結婚したことになるが，一般には二重結婚は許されないという言語外的事実により，この解釈は奇妙なものとなるが，この奇妙さは言語自体のものではない。第二の解釈では，妻は四郎の妻であることになるが，この語は，結婚時点での対象の記述であると考えうる。儀式などを除けば，既に自分の妻である女と再度結婚することはありえないので，この解釈も奇妙である。第三の解釈では，妻は四郎の妻で，かつ，発話時点における記述であるとすることができる。次に「美人」の方の所属を考えてみよう。このときは，「妻」の方はもっとも普通である第三の解釈に固定してしまう。第一の解釈では，美人であるのは現在であり，結婚時点ではどうなっていたかについては何も言っていないとする解釈である（美人だったかも知れないし，そうでなかったかも知れないし，話者は四郎が結婚後の知り合いであり，そもそもどちらとも知らないのかもしれない）。第二の解釈では，美人とは結婚時点での記述であるとする解釈である。この後の方の解釈は一見唐突に思えるが，次のような文脈においては何ら唐突でなくなる。

(26) 四郎はせっかく美人の妻と結婚したところ，彼女は結婚三日後に交通事故ににに逢って，お岩さんになってしまった。

この最後の解釈を図示すると次のようになる。

(27)



この解釈においては，「美人の妻」という指示表現が二つの世界にまたがる属性を集めることによって成り立っている。そして，極端な場合には，そのいずれの世界においても，「美人の妻」という記述が不適当である可能性がある。この点はこれまでには見られなかった特徴である。

Jackendoff は上記の論文において，話者の現実世界と，その対応する像の世界の非対称性を前提しており，像の世界の対象を記述するのに，現実世界での対応する対象の記述をもって行ないうるが，その逆は普通でないと考えた。この現実世界優位の特殊な形而上学的思い込みに対して， Fauconnier は，この二つの世界は対称的であることを示した。例えば絵の中に描かれている茶色の眼をした少女のことを，モデルの方を考えずにしばらくの間話題にした後に，次のような文を言ったとする（(28)は Fauconnier による）。

(28) Dans la réalité, la fille aux yeux marrons a les yeux bleus.

下線部の記述に見られるように，現実世界のモデルを語るのに，像の世界での記述が使われている。すなわち，現実世界もまた多くの世界の中の一つであり，像の世界に対して，像の世界の関係に入りうる。「実際のところは」，「本当は」，「実は」などの副詞は像の世界から現実世界へ戻ることを示す指令である。別言するなら，e，i を現実世界，像世界での対象とし，R を e と i の間の関係とし，de,di を e，i の記述とすれば，R(de) = i という関数（厳密な意味での関数 — de が与えられたときに，一意的に i が決まる — ではないかも知れない。そのときは自然言語では，別の記述に変えたりする。更に上の式は，実をいうなら式の定式化自体に問題がある。例えば(25)で， de =美人の妻から，i =四郎が結婚した女 — その時点ではまだ妻でない — を探し出すためには，R は当の相手が四郎であることや，もし四郎が数回結婚したのなら，問題になっている結婚の日付などの情報も考慮に入れなくてはいけなくなる。）があるときは，その関数を逆利用して R(di) = e とする関数がありうる。これは関数 f(e) = i とその逆関数 $f^{-1}(e) = i$ に類似した関係にあるといえよう。しかし，(25)の最後の解釈において名詞句「美人の妻」が，現実世界と像世界にまたがる属性を取り集めて構成されているような例では，まるきり現実の世界とも，まるきり像の世界とも言いきれないような融合した世界が出来ることは，更に複雑な取り扱いを要求しているように思える。同様な例は次章でも見

られる。

人間の言語行為は，唯一個の均質的世界，別言すれば，唯一つの観点から解釈された対象世界に限定されているわけでなく，同時にいくつかの世界に言及している。そして，それらの世界は，互いに独立しているわけではなく，さまざまな関連のしかたで結ばれている。例えば，ある国では，年度別のインフレーションが政府の公式発表で80％であれば，実際には120％程度であるということである。このときに

(29) 今年のインフレ率は80％なのに，私の給料は100％しか上がらなかった。

といって，給料値上げを要求する人は理不尽なことをしているわけでなく，公式のインフレ率という像世界の表現を使いながら，現実世界のインフレ率に言及しているのである。ある観点からの対象の解釈，そしてそれに由来する言語化を声と呼ぶなら，人間の言語行為は本質的に多声的である。この解釈の主体が，個体として同一の人間であるか，異なる個人であるかは，現象自体にとってはさほど重要ではない。解釈体系の差異が大きくなるにつれ，一つの世界での記述は別の世界では引用と考えられるようになり，「いわゆる」「…によれば」または『　』などの引用導入表現を伴って表われることがある。さまざまな副詞句「法律的には」「言語学的には」「親としては」「教育的観点からは」「公式には」などの機能は，ある解釈体系の導入である。ある解釈体系の導入が対照的に解釈される場合には，それ独得の言外の意味を伝える。例えば，

(30) 理論的には，この説明は整合的である。

(30)は，「実際には，その説明は事実と矛盾する」と解釈されやすい。この問題は，会話の含意 (Grice, ≪ *Logic and Conversation* ≫, in *Cole–Morgan*, Academic Press, 1975) と呼ばれる現象で，他の論文 (*L'Interaction de l'Inférence avec la Présentation de la Condition*, thèse du 3$^{e}$ cycle, Paris VIII) で詳しく扱っているので，ここでは取り扱わない。また，時間，空間表現も，そこに表われる対象にある特殊な解釈を要求することにより，解釈導入表現と同じ機能を果しうる。

(31) 法律的には，英雄も犯罪者たりうる。

(32) ニコライ２世には，英雄も犯罪者であった。

(33) 1917年以前には，英雄も犯罪者であった。

(34) ソビエトでは，英雄も犯罪者である。

(31)から(34)までの文に表われている「英雄」という記述は，字面通りの解釈 — すなわち，限定表現が導入する世界内での記述 — と考えることができる。そのときには，(31)の法律は奇妙な法律となり，(32)のニコライ２世，及び(33)，(34)の話者は不思議な信念の持主となる。一方，「英雄」が別の世界での記述とすれば，この奇妙さはなくなる。

この章では，ある文の解釈が曖昧になる原因を，その中に表われる名詞句がその文により導入される複数の世界のいずれにも属しうるという事実に焦点を当てつつ考察した。この問題は，次章及び次々章において，さらに一般的な形を取って議論され，その底にあるメカニスムの解明を試みる。

## 4. 前提の漏出

自然言語には，ある対象や事態に同じように適用されながら，含みに差のある類義語がたくさんある。この含みをニュアンスと呼ぼうが，コノテーションと呼ぼうが，前提としようが，以下の論議にはたいして重要ではない。ある場合においてはこの含みの差がある単語の使用をタブー化したり，廃語にしたりすることさえある。例えば，便所，トイレ，W. C.，レストルームの差はこの含みにある。また，仲人がある娘を紹介するに際して，

(1) a　この人は，学生時代大変な努力家で，勉強が良くできるのを誇りにしていた。

　　b　この人は，学生時代ひどいガリ勉で，成績がいいのを鼻にかけていた。

(1b) のように言ったら，その娘について受ける印象は，(1a) の場合と余程違ったものになるのは疑いを容れない。

間接話法による報告文が，一応は不透明な文脈と考えられるが，その中に表われ

る名詞句がもとの文で使われていた名詞句を，同一指示の名詞句で置き換えたとする de re の解釈も成り立ちうるのは，第3章において見た通りである。次の例では，もとの文にあった語が，含みの差のある同義語に変えられている。

(2) a　五郎：　僕の恋人は可愛い。
　　b　五郎は，自分のイロがハクイと言った。

(2b) が (2a) の忠実な報告文でないのは明白だが，結局のところ，ある時は真の報告文と考えられたり，偽の報告文ととられたりする（ (2b) が，その娘当人に向かって言われて，その娘が五郎本人の言葉は (2a) であるのを知ったような場合）。Quine (*Philosophie de la Logique*, Aubier, 1975) も，同様の観察を行なっている。

次に，言語句にかなりの同義性をもっており，ある状況の記述にそれらの語が使われたときに，そこから推論される結果は同じであるような対になる語を見てみよう。

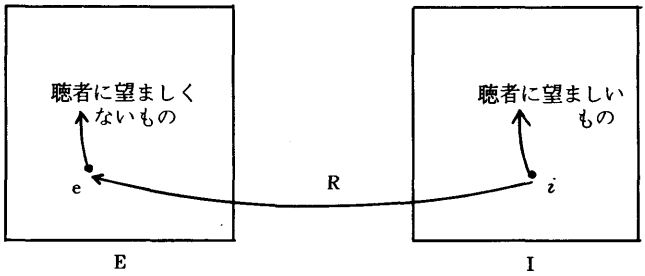
(3) a　彼は，授業への出席を差し止められた。
　　b　彼は，授業への出席を免除された。

(3a) は望ましいものを行なうのを禁止し，(3b) は，望ましくないものをしないですむ権利を許可するといった含みをもっている。この差異にもかかわらず，禁止を申しつける場合に，許可という形をとることがしばしば見られる。例えば，解雇するときに，

(4)　あなたは，明日から会社に来なくて結構です。

という時，自分の側からの禁止を，あたかも相手の希望への譲歩のように表現するのもその例である。プロ野球における「任意引退」が，実質的には「首切り」であるのは周知の事実である。しかしながら，自分の意思を強制する場合に，相手の希望への譲歩のように表現するのは，一つの社会的儀礼として半コード化している。そのような儀礼において，仮構される世界と現実の関係は，下図のようになり，

(5)




di を使って e を同定するわけで，そのことは誰でも知っている事実ではあるが，対人関係での圧軛を和らげるという社会的機能をもっている。もし，この社会的慣習のない社会から来た人 — すなわち，e が仮構された世界での記述 di により同定されている事実が理解できない — にとっては，(4)のように，望ましい結果を手に入れたはずの人が，何故しょげかえるのか不思議であろう。

さらに一歩進めて，同義語でない表現による置き換えを見てみよう。ある男が，自分の妻か子供を医者の誤診か，そうした事情で失い，その後，その男は「医者＝人殺し」という思い込みをもったとする。この男の親戚に，千鶴子という娘がいて，その娘の婚約者が医者であるとしよう。このとき

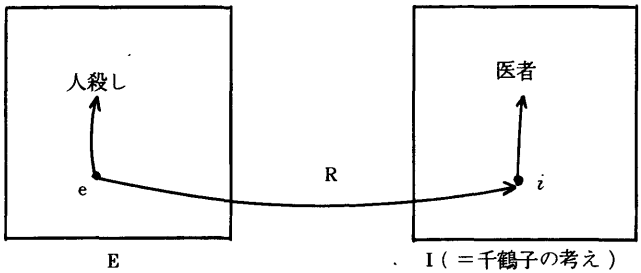
(6) a　千鶴子：　私の婚約者は医者です。
　　b　千鶴子は，自分の婚約者が人殺しだと言った。

(6b) は，(6a) の報告文として通用することもある。また，

(7)　千鶴子は，人殺しと結婚するつもりである。

という文が，千鶴子の意図を記述した文でありうる。ここに見られるのは，現実（＝話者の思い込み全体）での偏見や考えによって，像世界の対象の記述に変えることができるということである。この例を図示すると次の通りになる。

(8)




千鶴子自身は，ｉを医者と考え，人殺しとは考えていない。一方話者は，ｅを多分医者と考えてはいるが，さらにそれを人殺しとしてとらえている。このとき，千鶴子の考えを述べるのに，話者自身の偏見をそこに持ち込むことができる。すなわち(4)は，de reの解釈によれば，上の通りで，de dictoの解釈をとれば，千鶴子もまた（または，千鶴子だけが）医者は人殺しと考えており，しかし，それでも別の理由（例えば，医者は裕福であるとか，千鶴子は人殺しを愛する特別の理由があるなど）によって，結婚するつもりであることを述べた文になる。また(7)が(8)のような de re の報告文であるときは，千鶴子自身は，医者について正反対の考え（医者＝人命救助者）をもっている場合さえありうる。[4)]

このように，他人の言葉や考えを述べるのに，その人自身に帰属しない，話者の思い込みによって，他人の言葉や考えを記述する場合，思い込みは一時的なものでも，また個別的なものでも良いし（例えば，ある医者に限って，「医者＝人殺し」が成立している），ある場合には思い込んでいる振りをしているだけでも構わない。要するに，発話の時点で話者の考えの中に，像世界と別な記述があれば構わない。含みの異なる同義語による置換が，話者の思い込みによる記述の置換と同じ原則によるものであるのは明らかで ― 前者は，多少とも，ある言語内では恒常的であるのに，後者は，話者自身が代置記述を提供せねばならないという差はある ― 前者は後者の特殊例にすぎない。ここで話者が正しいと思っている考え，偏見などの全体を，前提と呼ぶならば，上の例は，話者の前提が不透明文脈の中にも漏入することであると言える。

この現象の基礎は，ある事象は解釈体系が異なれば異なって見えるという事実であり，人間は外界の事象を常に解釈しつつ生きており，かつ各人のもっている解釈体系は多少とも異なっている。われわれは日常経験からこうした解釈体系の差異を

知っており，また他人の立場からある事象を解釈したり，自分のなかにもさまざまな解釈体系を内在化しているという点において，既に自己の中にも他者性をもっている。別言するなら，意識するにしろ無意識的であれ，いくつかの異なる世界を同時に体験しているということである。この差は社会的，文化的文脈が異なれば，さらに大きなものとなり，遂には現象面は理解しても，その意味は不透明なものとなる。たとえ同じ文化的文脈に生きていても，そうしたことは割と頻繁に起こりうる。そうしたときに話者は，ある事象の解釈を自分の観点から行ない，かつその解釈を，別な解釈に優先して言語化したとき，その事象の de re の表現になる。

以下において，原則そのものは同じであるが，より一般的に前提と呼ばれる事象についても同様な観察が行ないうることを見る。(9)の文は，(10)のような前提をもつと言われる。

(9) 春江はまた電話してきた。
(10) 春江は，(9)の発話時点以前に，電話した。

母親が家にいるときに，一度春江が電話してきたとする。その後，父親と子供が帰ってきたときに更に春江から電話があり，子供がその電話に対応したとする。このとき子供自身は，それ以前に電話があったのを知らないから，

(11) 春江さんから電話があったよ。

と言ったとする。すると母親の方は既に電話があったのを知っているので，父親に，次のように報告したとする。

(12) 春江さんからまた電話があったそうです。

(12)は(11)の報告文という形をとりながらも，(11)の話者には知り得ない前提（＝(10)）がまぎれ込んでいる。

「xがAになる」という変化を表わす動詞は，「xは，それ以前はAでなかった」ことを前提とする。静代は，つい最近，六郎にあってその賢さに感心しているとする。ある日に，六郎が馬鹿であると思っているが，ここしばらくは六郎にあってい

ない，六郎の友人に次のように語ったとする。

(13) 六郎さんは賢いですね。

その友人が，静代の言葉(13)を，別の友人に(14)のように伝えたとする。

(14) 静代さんは，六郎が賢くなったと言った。
(14′) 静代さんは，六郎が馬鹿でなくなったと言った。

(14)(14′)の文の中には，話者の知識をもってはじめて可能になる前提が含まれている。もっとコンパクトな例では，性転換者は，以前は別の性であったことを前提としている。ある人が，性転換者であるのを知らずに(15)のように言ったのを，(16)のように報告した場合も(13)と(14)のような関係が見られることになる。

(15) あの女の人は美しい。
(16) 某君が，あの性転換者を美しいと言った。

3章において「美人の妻」という表現が，別々の世界に属している記述の融合であるのを見たが，次例でも同様な現象が認められる。

(17) 八郎は，九郎だけしか好きでない友子が，十郎も好きであると思っている。

関係節「九郎だけしか好きでない友子」の中の前提導入表現「だけしか…ない」により，この文は「友子は九郎が好きである」を前提とし，「友子は九郎以外の男を好きでない」，特にこの文脈においては，「友子は十郎が好きでない」ことを断定する。一方，従属節中の主節，「友子が十郎も好きである」の中の前提導入表現「…も…」により，「友子は，十郎以外にも好きなものがいる」，この文脈においては，話題が九郎と十郎に集約されているとすれば，特に「友子は九郎が好きである」が前提となる。整理すると，次のようになる。

(18) 従属節中の関係節は，次のaを断定し，bを前提とする。
a. 友子は十郎が好きでない。

b. 友子は九郎が好きである。

(19) 従属節中の主文は，次のaを断定し，bを前提とする。

a. 友子は十郎が好きである。

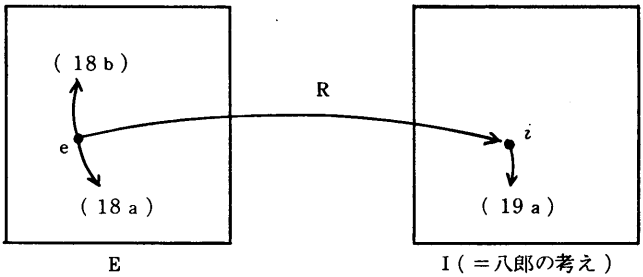
b. 友子は九郎が好きである。

さて，この準備ののちに，(17)の解釈を見てみよう。従属節中の主文の断定は必ず八郎の考えを表わしていなければならない。第一の解釈によれば，従属節主文の断定，前提，および関係節の断定，前提全部が，八郎の思っていることとなる。この de dicto の解釈のもとでは，(18)と(19)が矛盾をおこすので，八郎は矛盾した考えをもっていることになる。したがって，八郎が頭がおかしいとでも考えない限り，あまりありそうな事態ではない。第二の解釈によれば，関係節は，話者によってなされた注釈のごときもので，従属節主文の断定，前提のみが，八郎の考えを反映していることになる。第三の解釈によるなら，八郎の考えは(19a)，すなわち従属節主文の断定に限られる。(17)に続けて，(20)のように言ったとしよう。

(20) … と言ったところで，八郎は本当に友子が九郎を好きであると思っているわけではなく，現に，八郎は九郎が誰であるかも知らない。

(17)のあとに(20)が続けば，(17)の解釈は必然的に第三の解釈になる。この解釈を図示すると次のようになる。

(21)




すなわち，八郎の考え（＝(19a)）を，「友子は十郎も好きである」と記述することによって，(19a)と矛盾しない，話者の前提（＝(18b)）を八郎の考えのなかに流入したことになる。このとき従属文の主節での「…も…」の使用をさらに細かく

観察するなら，話者は，友子は十郎が好きでないと思っているから，話者自身の考えでありえず，一方，八郎は友子が九郎を好きであるとは思っていないので，八郎にとっても不可能である。結局のところ，「…も…」が使えるのは，話者及び八郎の考えの融合した部分である。一般に，

(22) Aは〔$S_1$ …〕と思っている。

という文脈において，$S_1$が，ある命題Pを前提するなら，PはAの前提であるとされるが，上の例ではこれが当てはまらないこともあるのがわかる。また，一般に，

(23) Aは〔$S_1$ …〕を後悔している。

のように，叙実動詞を含む文では，$S_1$がある命題Pを前提するなら，話者もまたPを前提するという説明にある制限を加えねばならないことを示唆する例を見てみたい。

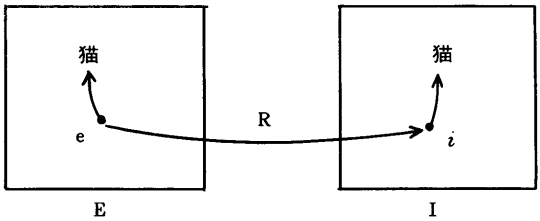
(24) 愛子は，猫を轢き殺したのを後悔している。

(24)の最初の解釈は，話者も愛子が猫を轢き殺したと考えている場合である。第二の解釈では，話者自身は，愛子が轢き殺したのは鼠であるのを知っていて，愛子の考えを愛子の考え通りに記述しているという de dicto の解釈である。このときは，(24)に続けて(25)のように述べることが可能である。

(25) …しかし，実際には，愛子が轢き殺したのは猫でなく鼠である。

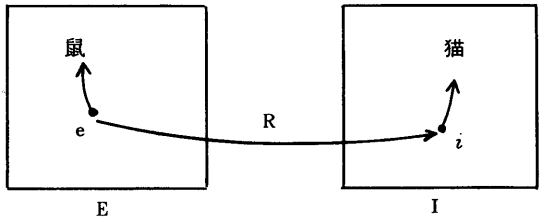
このとき，(25)に見られる「実際には」という副詞句は，愛子の考えから，話者自身の世界へ戻ることを指令している。第三の解釈では，猫というのは話者による記述で，愛子は鼠を轢き殺したと思っている de re の解釈である。この三通りの解釈を図示すると，次のようになる。

(26) a.



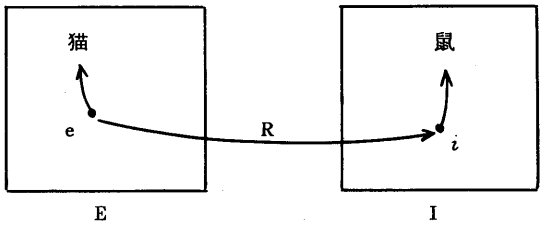

iはdiによって同定されている。

b.




iはdiによって同定されている。

c.




iはdeによって同定されている。

さらに，実際には，その轢かれたものが死ななかったことを話者自身は知っていたと考えると，更に三通り増え，結局六通り解釈できる。とすると，(24)のような叙実動詞を含んだ文を発話した場合に，話者自身の前提がどういうものであるかはわからないことになり，結局のところ，愛子がiを轢き殺したという前提が，愛子自身の前提として残るだけである。

これまでの論議をまとめてみると，次のようになる。ある発話は，話者にとらえられた限りでの発言であるから，話者のもっている考えや偏見などによる記述が，ある限界内においては，よりその事態を記述するのに適切な表現に取って換わることができる。この自由さの裏返しとして，報告文中にみられる名詞句の記述が，全

的に話者自身に所属するものか，また元の話者の言葉であるかは，一概には言えないことになる。

## 5. 換喩，指示及び意味

Nunberg は，*The Pragmatics of Reference* (Indiana University Linguistics Club, 1977 ) において，言語の運用が基本的に換喩的であり，換喩は，さらに，話者のもっている言語外的知識に裏付けられているのを明らかにした。この立場からするなら，実際に文や単語がある状況で，ある意味をもって使われた場合に，その認識された意味そのものが果して言語による意味であるか，逆に，言語がその文脈で使われたことによって生じる派生的意味 — すなわち言語学的意味でない — か，即座に決めかねるということである。

(1) 私は昨日 Balzac を読んだ。

という文の中に出てくる「 Balzac 」は著者自身でなく， Balzac の著作であり，もっと厳密には，その著作が印刷された本 ( type としての ) のうちの特殊例 ( token としての ) としての Balzac の本ということになる。 知る限りでは，Balzac の項目に，「 Balzac の本」という意味記載のある辞書はない。辞書製作者は，暗黙のうちに， Balzac が Balzac の本の意味になるのは，偶々 Balzac が著作家であったという周知の事実による派生的意味にすぎないことを認めているわけである。 Petit Robert では， boeuf の項目には「動物としての牛」の他に，「牛の肉」という記載がみられる。 porc も同様。ところが， renard, ours, éléphant の項目には，動物としてのきつね，熊，象の意味の記載はあるが， 肉としての意味は書かれていない。ところが，次の文においては，それらの動物の肉が問題になっているのは，子供にもわかることである。

(2) Paul a mangé du renard (de l'ours, de l'éléphant).

教育的配慮とか使いやすさなどを考慮せずに，専ら言語学での意味論の立場からは，このような首尾一貫のなさは容認するわけには行かない。 同じように， porc と

renard には「その動物の皮」という意味記載が見られるが， boeuf, ours, éléphant には，その旨の記載はない。しかし，ちょっと文脈を与えれば，そうした意味に使えるのは明白である。既に，肉や皮を表わす単語が存在しない限り — 例えば，英語では，牛，豚，羊には beef, pork, mutton のように，肉には動物とは異なる語が既に用意されている — すべての動物は，「…を食べる」という文脈ではその動物の肉の意味になる。人間も動物だから「人を食べる」という文脈では，人肉の意であるが，人間の項目に「人肉」の意味記載のある辞書はまずないであろう。結局，ある単語Aが動物，または一般に肉をもった生き物を意味するなら，Aはそれらの生物の肉という意味を持ちうるということである。とすれば，boeufや porc がある文脈で肉という意味に使われるからといって，それらの語が，既に肉という意味を持っているとは言えないということになる。結局，それらの語が肉という意味に使われるのは，われわれが持っている動物というものに対する概念と，食べるという概念から推論された派生的意味にすぎず，その動物を表わす単語に，肉という意味を与えることは，無くても済む仮説を設けて意味記述を繁雑にするに停らず，その意味が言語の知識に直接帰属しており，別言すれば，ある言語のしきたりとして，その意味は動物という意味と関係はもっているが，それと独立して習得せねばならないという仮説を設けていることにもなる。この仮説の適，不適は，言語の全体系との関連において決定されるべきものであるが，その手続きなしでも不適当であろうと推察される。実際のところ，フランス語で boeuf が牛という動物であることを習った人は，肉の方の意味があるとは教えられなくても，「Marie a mangé du boeuf.」の中の boeuf が何であるかは即座に理解する。Jakobson が失語症の研究（≪ *Deux aspects du langage et deux types d'aphasie* ≫, in *Essais de Linguistique générale,* Seuil, 1963）で使っているように，換喩を広い意味に解釈し，xとyがある文脈の中で一緒に表われることにより，x，yが代置可能になる現象とするなら，上に述べたような議論は，換喩による派生的意味は言語学的意味とは認めないという態度である。上のような例だけを扱うつもりであれば， Saussure が述べているようなアナロジーという概念を使って，boeuf に肉という意味があると認めた上で，

(3) boeuf －動物：boeuf －肉＝ renard－動物：renard － x

より，右辺のxは肉であると計算されると考えても良かったのであるが，この図式

はむしろ暗喩の説明に良く当てはまり，換喩の説明全般には不適当である。

次に，上に述べたようにある言語内において安定している換喩と異なり，文脈の知識に強く依存している換喩の例を見てみよう。食堂である食べ物を食べた場合に，その当人はその食べた物によって指示できる。

(4) かつ丼が，金を払わずに逃げたぞ。

本屋で Balzac の本を買った人は，この著者名によって指示できる。

(5) あら，お釣まちがえちゃった。さっきの Balzac さん，どこにいったのかしら。

(4)や(5)の例があるからといって，「かつ丼」に「それを食べた人」とか，「Balzac」に「 Balzac を買った人」のような意味があるとは考えられないであろう。しかもこの現象は，「かつ丼」だけでなく食べ物ならなんでも構わないわけで，一方，本の方も「 Balzac 」に限られるわけでない。[5] 更にこれは，食べ物，本に限られるだけでなく，おおまかに言えば，ある文脈において x と y がある関係 R にあるとき，R(x)＝y というような関数としてとらえられる。[6]

通常の理解においては，換喩とは，同一世界に属する二つの対象A，Bの間にある関係 ― Jakobson は，隣接性 (contiguïté) と言っている ― が，多少とも恒常的に認められるとき，Aによって B を表現することであるとされる。一方，4章およびこの章で考察されたような例は，主としてある一つの対象が別の世界に属する，または別の観点による記述をうける場合に，その記述が交換可能になる現象であった。簡単にいうなら，前者は複数個の対象に同一の言語表現が適用され，後者では，一応は同一と見なせる対象に複数個の言語表現が適用される。次の例はラジオで聞いた遣り取りである。

(6) A：北の湖が小さかった頃…
B：北の湖が小さかったことがあるんですか？　知らなかった。

(6)は後者の例の一つである。この「小さい」を子供時代をさすにしろ，身長または体格をさすにしろ，Aが「北の湖」という記述で言及している対象は，相撲取りに

なり「北の湖」と名乗り始めてからの北の湖ではなく，北の湖の子供であった頃のことである。一方，Bは（当然そんなことは理解しているが）「北の湖」という表現を，厳密にその表現が適用できる世界に限定して解釈する振りをしている。これは以前に「フランス語では，花は女性名詞である」という文が，一つには「花」がフランス語の単語であると見なすことにより理不尽な解釈になり，別の解釈では「fleur」に変わって使われていると解することにより整合的な解釈になるのを見たが，上の「北の湖」の遣り取りも，この例と同じことをしている。結局のところ，「北の湖」（相撲取り）は「北の湖が子供だった頃の，その子供」とある意味では同一人物ではあるが，ある意味では別の人である。物としての花は，フランス語でも日本語でも似たり寄ったりであろうが，日本語の「花」は，フランス語の「fleur」ではない。すなわち，対象間の同一性はある意味では前提されているが，視点が異なるなら別の対象であるとも言える。

したがって，換喩において，異なる対象A，Bを，その対象のもつ隣接性により，Aの記述でBを指示するのと，二つの世界における前提された同一性により，ある世界の記述で，別の世界の対象を指示するのとは，それらのメカニズムにおいては同一の現象であり，共にx，yの関係Rを利用して，R(x)＝yのような関数を作り出すことである。さらに，前提された同一性は隣接性の特殊な場合（その逆は真ではない）であるとするなら，3章及び4章の例のように現実と像世界がある関係によって結ばれているとき，現実世界での記述で像世界の対象を指示できるのは，換喩の特殊例またはその延長にすぎないということである。特殊例はそれ自体，全体的な理論からは説明されない特殊性や興味をもってはいるが，やはりその根底にあるメカニズムによって説明されるべきである。さらに次章において，暗喩の最近の研究を概観するが，言語の基本的な性格が，換喩と暗喩にあるのを看破しているJakobson の慧眼には恐るべきものがあることを付け加えておこう[7]。

## 6. 暗　　喩

Lakoff と Johnson は *Metaphors we live by* (Chicago University Press, 1980) において，日常的に使われている暗喩の研究により，暗喩の根底にあるのは言語の問題というより，むしろわれわれの世界理解の方法であることを明らかにした。すなわち，直接的には理解困難な事象を，もっと根元的なよりよく理解され

た概念を使って理解する努力である。例えば議論は，戦いに比べられて理解される。(1)に彼らの挙げている例を引用する。

a. Your claims are indefensible.
b. He attacked a very weak point in my argument.
c. His criticisms were right on target.
d. I demolished his argument.
e. I've never won an argument with him.
f. You disagree? Okay, shoot.
g. If you use that strategy, he'll wipe you out.
h. He shot down all of my arguments.

戦争は武器やテクニックの変遷にもかかわらず，その本質においては同じで，攻撃，防御，威嚇，徹退などは犬の喧嘩にさえ見られ，確実に理解されている概念であることは疑いを容れない。この良く理解された概念によって論争を理解することによって，われわれは，論争を戦争として理解し，戦争として体験することになる。暗喩によるある領域の概念化は，その領域にあるもとの領域との共通特性に焦点を与えることにより，その領域のもつもとの領域にない特性を隠してしまう。すなわち，ある対象に関して特殊な観点から接近することを暗黙のうちに了解しているということになり，暗喩による概念化は偏向的である。論争を戦争の暗喩により概念化することは，例えば，ある賢人同士の穏やかな叡知に満ちた会話が，論争であるとは考えられないという結果になってしまう。つまり，戦争という概念によって理解された論争からは，論争がもっている戦争と相容れない側面はすべてはじき出されてしまう。また，暗喩によるあるものの概念化は組識的である。論争が戦争と結びつけられることにより，戦争の中に見られるさまざまな事物や事態が，論争の中の対応物に関連付けられる。しかしながら，もとになる概念の構成要素が全部使われるとは限らない。われわれは，理論を建築の概念によって理解している。構造，基礎，土台，建てる，構築する，など両方の分野に使われる語は多い。それどころか，建築に関係する語を使わずして，理論のことを語るのは不可能に近い。しかし理論を語る場合に使われる建築用語は，土台と外側の見える部分に限られており，屋根，部屋，階段などはあまり使われない。しかし，全体として理論が建築として理解されているために，それらの使われてない部分を使う可能性は残っている。

Johnson, Lakoff は次のような例を作っている。

(2) a. His theory has thousands of little rooms and long, winding corridors.
b. His theories are Bauhaus in their pseudofunctional simplicity.
c. He prefers massive Gothic theories covered with gorgoyles.
d. Complex theories usually have problems with the plumbing.

実際この種の既に基礎づけられた暗喩の延長は，簡単に行なえる。例えば最近の生成文法の痕跡理論を，資料倉庫なり，非常口なり，お宝入れと考えることにより，次のようなことが言える。

(3) 最近のチョムスキー理論には，資料倉庫（非常口，お宝入れ）がついている。

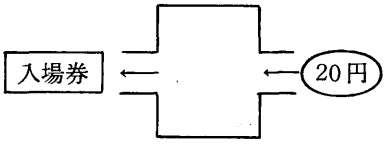
Johnson, Lakoff によれば，暗喩はすでに理解された二つの異なる領域を比較するのでなく，根本的に理解された概念で，より理解困難な領域を概念化していくから，暗喩は必然的に非対称的である。上記の例では，論争は戦争の概念により，理論は建築の概念により，概念化されているが，その逆は真でない。例えば，開かずの間のある家をさして，

(4) この家には，まだ証明されていない仮説がある。

という暗喩は，ひどく不自然である。これは既に二つの領域での概念化の非対称性のあらわれであり，暗喩が単に，既に独立した理解されている領域を比較しており，結局言語の綾に過ぎないとみなす狭い解釈からは説明されえない事実である。

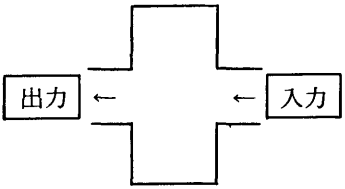
次に，比喩まで含めた暗喩が，一つの理解困難な概念の説明に使われている実例を見てみよう。遠山啓の『現代数学対話』（岩波新書）は，数学者が，友人の哲学者と実業家に，数学のいくつかの概念を説明する対話という形を取っている。関数 f(x)＝y とは，x のある値に応じて y のある値が定まるというようなところから始めずに，まず自動販売機の例を出している。ここでは自動販売機の機能 ― きまった金額を入れると，きまったものが出てくる ― の理解という日常的経験が利用されている。その図式は次の通りである。

(5)



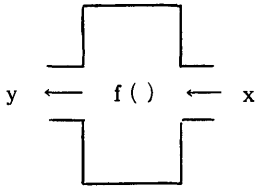
次に，工学者の暗箱（ブラックボックス）に比較される。この段階では，特に暗箱は（自動販売機でも同様だが），内部機構を理解しないでもある一定の入力 (input)が入ってくれば，一定の方式で加工してある一定の出力 (output) を出すというところに焦点が置かれている。それは次のようになる。

(6)




次に機械とは多かれ少なかれ暗箱の性質をもっている ― ジューサーに果物を入れるとジュースになって出て来，ラジオでは電波が入れば音になって出てくる ― という話ののち，暗箱を記号化し，装置そのものを f で表わすことになる。

(7)

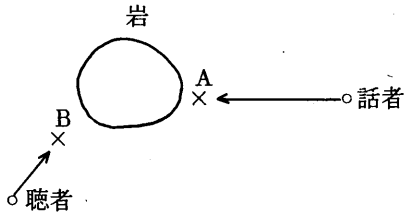



その後この概念はますます複雑な比喩によって説明されているが省略する。この例からわかるように，関数の説明に，まず自動販売機を持ち出してきたことが，後の説明を多かれ少なかれ決定している。この意味で，この比喩は組識的であり，説明用具の方は，ある一定の必然的関連をもったものから選択されている。しかもこの説明が，自動販売機を日常的に体験していることを前提にしているという意味で，ある文化的，歴史的文脈の中でしか理解されず，文化的，歴史的に無制約に通用する比喩ではない。 Johnson, Lakoffは，現代のある社会において「時は金なり」の暗喩が，いかに時間概念そのものの変容をもたらし，また，時によって計られる限りの労働の概念の変化を引き起こすかを述べており，金銭経済の発達しないか，存在しない社会では，その暗喩そのものが不可能なために，時間概念，労働概念も違ったものになるだろうと述べている。

2章で Frege の等号の概念に触れたが，ここでさらに，自然言語の等価物である「AはBである」という表現について考えてみたい。この述語「…である」の最

大の機能は，二つの非対称的概念を結びつけることにある。例えば，ある状態で知られたAというものが，別の状況で知られたBと同じものであることが知られていない場合に，「AはBである」は，二つの世界を結びつける演算子の役割をしている。またこの述語は，Aをより良く理解された概念Bに還元する役割をもっている。このときは，表面上はメタランガージュになるが，大概の場合には概念間の関係であり，「花は名詞である」「花は日本語の単語である」のような例はまれである。これらのすべての場合に共通しているのは，それまで関係をもっていなかった対象の間にある関係を導入することである。例えばオイディプスが，自分の妻が自分の母親であることを知らない状態から，自分の妻が自分の母親でもあることを知る状態への変化のごときものである。

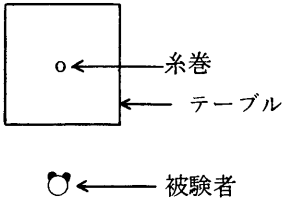
次に「前」という語が抽象的位置関係を表わす場合の，その用法と記述される客観的位置関係との対応パターンの考察により，この用法が既に暗喩的であり，その基礎になっているのは対人関係 — そして恐らくは，幼児期の母親との関係 — の，抽象的位置関係への投影であることを見る。このように位置関係の認識の心理的要因を理解することは，ある文の使用にあたっての曖昧さが，その文の意味のレベルにおける曖昧さであるか，または，その文の意味の解釈に動員された認識モデルの曖昧さであるかを決定するのに有効である。例えば，「その本を黒板の前に置きなさい」という文は，意味のレベルのみならず，その意味の解釈による現実世界との対応レベルにおいても，一義的にしか解釈されえない。これは後に明らかになるように，黒板という対象が，それ固有の方向性（orientation）をもっており，われわれは，その対象の方向性をそのまま容認する傾向があるからである。一方，指示対象が固有の方向性をもっていない場合には，対象の方向性は，普通は話者の位置，そして，その位置からの話者の対象への視線と関連して作り出される。また，まれに，聴者の位置，そして，その位置から対象への視線と関連して作り出される。このことから，「あの岩の前に，これを置きなさい」という文が指示している位置は，次の図のようにAともBとも考えられる。



したがって，「前」というのは，二つの意味を持ち，ある場合には「話者にとっての前」，別の場合には「聴者にとっての前」と考えることもできる。こうした曖昧さが認められるときに，それが言語の意味による曖昧さか，それとも，その意味を解釈する思考モデルの曖昧さであるかを決定するには，より広範な実例の観察から得られる「前」という位置関係の基礎にある概念化を調べる必要がある。

この実験は，被験者に，眼前のテーブルの上の状態を言葉によって記述してもらうという形をとっている。[8)]

(8) 小物体（この実験では，偶々，小さな糸巻が使われたが，それ自体は重要でない）がテーブルの上に置かれている。




このときの返答の主なるものは，次の通りである。

a. 糸巻が自分の前にある。(La bobine est devant moi.)

b. 糸巻がテーブルの上にある。 (La bobine est sur la table.)

ところが誰一人として，

c. 私は，糸巻の前にいる。(Je suis devant la bobine.)

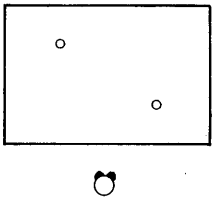
d. テーブルは，糸巻の下にある。 (La table est sous la bobine.)

とは答えない。単なる位置関係に関する限りａはｃと，ｂはｄと等値である。ａの答においては，被験者は自分自身を位置付けの目印にとり，自分自身に対して対象を位置付けている。ｂの答においては，話者はテーブルを位置付けの目印にとり，それに対して対象を位置付けている。

この返答で既に明らかなのは，話者の感情移入 (empathy; Kuno & Kaburaki, ≪ *Empathy and Syntax* ≫, in *Linguistic Inquiry 8*, 1977; Kuno, ≪ *Subject, Theme, and the Speaker's Empathy–A Reexamination of Relativization Phenomena* ≫, in *Subject and Topic*, ed. by Li, Academic Press, 1976; 久野瞳 『談話の文法』大修館，1978，など参照）は，位置付けの目印になる自

分やテーブルの方に向っており，その限りでこの状況では旧情報を構成している。一方，主語になる対象は，新情報に近い地位を与えられており，この最初の実験においては主題とは成り得ない。

(9) 同じ大きさの2個の糸巻がテーブルの上にある。



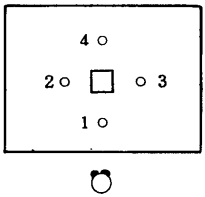
2個の糸巻は数回いろいろな位置に動かされ，その度に互いの位置関係が変わるが，興味をひくに足るような返答はあらわれず，主なる返答は(8)同様次の通りである。

a. 2個の糸巻が自分の前にある。(Les deux bobines sont devant moi.)

b. 2個の糸巻がテーブルの上にある。(Les deux bobines sont sur la table.)

2個の大きさの等しい物体は，互いに交換可能 — 心理的に — なために，どちらを好んで位置関係の中心に置くかが不安定で，結局あたかも1個の対象があるかのような返答がなされている。

(10) 正方形の箱（糸巻より数倍大きい）と，1個の糸巻がテーブルの上にある。（下の図は4つの実験をひとつにしたもので，糸巻は1回の実験では，1から4の位置のどれか1つに置かれている。4個1度にあるわけでない。）




糸巻が1の位置にあるとき，

a. 糸巻は，箱の前にある。(La bobine est devant la boîte.)

4の位置では，

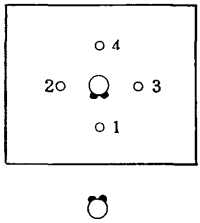
b. 糸巻は，箱の後ろにある。 (La bobine est derrière la boîte.)

2及び3の位置では，

c. 糸巻は，箱のそば／右／左にある。 (La bobine est à côté/la droite/la gauche de la boîte.)

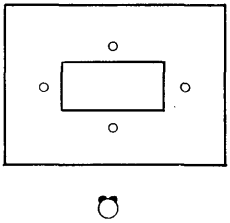
（このcの返答には，いわゆる左右の取り違いが考慮されており，2でも3の位置でもすべての返答が起こる。しかし，実はこれは左右の取り違いというより，目印になる物体への自己移入の差にあるのではないかと思う。例えば，2の位置にある糸巻を，「箱の右側にある」ということは，箱に対して完全な自己移入をしていることであり，「箱の左側にある」というのは，箱を目印にしながら，左右関係は話者を目印にした左右関係となっているということである。）

この4つの位置にある糸巻の位置付けは，箱の代わりに次のように被験者を見つめる人間を置いた場合と同一である。



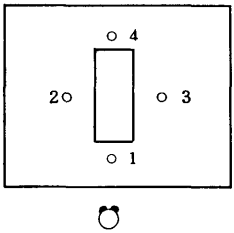

すでにこの段階において，人間は小さい物体を大きい物体に対して位置付け，かつ目印とされる物体は，話者を直視する他人と同一視される傾向があるのがわかる。

(11) 長方形の箱と糸巻がテーブルの上にあり，箱は長い方の面を被験者に向けている。



この場合の返答は(10)と全く同じである。

(12) 長方形の箱と糸巻がテーブルの上にあるが，今度は，箱は短い方の面を被験者に向けている。




糸巻が1の位置にあるとき，

a. 糸巻は箱のわきにある。(La bobine est à côté de la boîte.)

b. 糸巻は箱の前にある。(La bobine est devant la boîte.)

4の位置では，

c. 糸巻は箱のわきにある。(La bobine est à côté de la boîte.)

d. 糸巻は箱の後ろにある。(La bobine est derrière la boîte.)

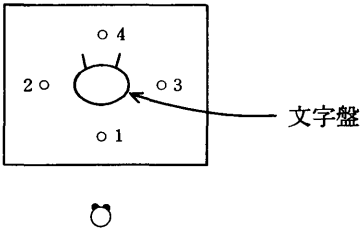
2及び3の位置では，

e. 糸巻は箱のわきにある。(La bobine est à côté de la boîte.)

f. 糸巻は箱の前にある。(La bobine est devant la boîte.)

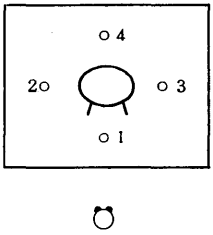
(11)と(12)の比較より，人間は長方形の箱の場合長い方の面を，正面または人間の顔と同一視する傾向があるのがわかる。(11)のように長い方の面が被験者に向いている場合は，この同一視はまったく自然にその面を正面または顔とする。(12)の場合には，ある種の葛藤が認められる。1及び4の位置に糸巻があり，箱のもっている方向性を無視して，話者の視線の方向を重要視するなら，前または後ろという位置関係になる。逆に物体の方向性を重要視するなら，わきにあるという位置付けが行なわれる。また，糸巻が2，3の位置にあるときに，物体の方向性を無視し，話者の視線の方向を重要視するなら，糸巻は箱のわきにあることになり，その逆なら，長方形の箱は長い面を二つもっており，その間には取り立てて重要視するほどの差異はないので，いずれの面も正面とされうるという事情により，前にあるという位置付けが行なわれる。

(13) 糸巻と眼覚し時計が机の上にあり，眼覚し時計は被験者の方に文字盤を向けている。




返答は(10)，(11)と同じである。

(14) (13)と同じであるが，今度は，眼覚し時計は背を被験者に向けている。




1 の位置では，

a. 糸巻は，眼覚し時計の後ろにある。(La bobine est derrière le réveil.)

b. 糸巻は，眼覚し時計の前にある。(La bobine est devant le réveil.)

4 の位置では，

c. 糸巻は，眼覚し時計の前にある。(La bobine est devant le réveil.)

d. 糸巻きは，眼覚し時計の後ろにある。(La bobine est derrière le réveil.)

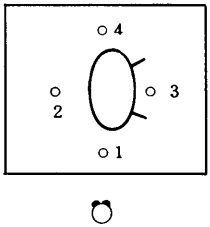
2 及び 3 の位置では，

e. 糸巻は，眼覚し時計のわき / 右 / 左にある。(La bobine est à côté/la droite/la gauche du réveil.)

この返答がこの実験で最も興味深いであろう。人間は眼覚し時計のようにそれ固有の方向性をもっている場合，その方向性を容易に受け入れる。長方形の箱の場合には，1 の位置にある糸巻を箱の後ろにあるとは決して言わない。ところが眼覚し時計の場合は，背が被験者に向いていれば，むしろその返答の方が多くなる。しかし，

眼覚し時計では，依然その方向性を無視する返答もありうる。この場合に，もし眼覚し時計のかわりに人間が背を向けているなら，この返答もほとんど背無になるであろう。

(15) 糸巻と眼覚し時計が机の上にあり，眼覚し時計は文字盤を視線の方向に対して直角の方に向けている。




1 の位置では，

a. 糸巻は，眼覚し時計のわきにある。(La bobine est à côté du réveil.)

b. 糸巻は，眼覚し時計の前にある。(La bobine est devant le réveil.)

4 の位置では，

c. 糸巻は，眼覚し時計のわきにある。(La bobine est à côté du réveil.)

d. 糸巻は，眼覚し時計の後ろにある。(La bobine est derrière le réveil.)

2 の位置では，

e. 糸巻は，眼覚し時計の前にある。(La bobine est devant le réveil.)

3 の位置では，

f. 糸巻は，眼覚し時計の後ろにある。(La bobine est derrière le réveil.)

この実験を補足するために，次のような状態を想像してみよう。

(16) 話者がノートルダム寺院の前にいて，教会のファサードを見ている。このとき，次の二つの返答は大体同じくらいの容易さであろう。

a. 私はノートルダム寺院の前にいる。(Je suis devant Notre-Dame.)

b. ノートルダム寺院が私の前にある。(Notre-Dame est devant moi.)

(17) (16)と同じ状況で，話者のかわりに誰か他人（例えば Jean ）がノートルダム寺院の前にいるとする。この場合には，

a. Jean はノートルダム寺院の前にいる。(Jean est devant Notre-Dame.)

b. ノートルダム寺院は Jean の前にある。(Notre-Dame est devant Jean.)

aの方がbよりずっと容易になる。

(18) (16)と同じ状況で，人間のかわりに，猫か蟻を置いてみる。このとき，

a. 猫がノートルダム寺院の前にいる。(Un chat est devant Notre-Dame.)

a′ 蟻がノートルダム寺院の前にいる。(Une fourmi est devant Notre-Dame.)

b. ノートルダム寺院が猫の前にある。(Notre-Dame est devant un chat.)

b′ ノートルダム寺院が蟻の前にある。(Notre-Dame est devant une fourmi.)

a, a′ に対して，b, b′ はほとんど不可能になる。

以上の考察は，位置づけるという行為が，いかに主観的な行為であるかを明らかにする。例えば，単なる位置関係が問題になっているならば，「AはBの前にある(A est devant B.)」は「BはAの前にある(B est devant A.)」と等価であろう。ところが，この段階でも既に，「BはAの後ろにある(B est derrière A.)」の方が自然である。しかし，さらに別の理由により，第2の言い換えも常に可能であるとは限らない。この前後という位置関係の決定に関与する主要な要因は，次の4つである。

(19) a. 話者の視線の方向(この視線は実際のものでも，想像上のものでも構わない。問題は，物体に対して，話者が自分をどこに位置付けるかである。)

b. 物体同士の相対的大きさ(大きな物体が通常目印とされる。)

c. 心理的距離(これは久野がいうところの empathy のごときものである。話者にとっては，自分自身がもっとも近く，次に他人，動物，静物のような順序になっており，この階層が低くなるにつれ，bの物体の大きさの方が重要視されるのは，(16), (17), (18)が示す通りである。)

d. 目印にされる物体の形(人間や眼覚し時計，教会などは，物体固有の方向性をそのまま受け入れるが，長方形，正方形，球の順に，どの面を重要視し，正面または顔と見るかが不安定になる。特に，正方形，球では，物体の方向性がなくなるので，視線の当たっている部分が正面になる。)

位置関係に関する限り，さまざまな言語 — 日本語，フランス語，ポルトガル語，英語では確実に，上記のようになり，調べた限りにおいては，ラテン語でも上の記述を変えねばならないような例はない — で前後関係の表現方法が同じなのは，それを支える経験の質が同じであるからだろう。空間認識の中心は，自己の身体であり，それもその本質的部分 — すなわち，最も発達した感覚としての視覚と関連しての正面 — との関係において解釈される。そして，この認識パターンは，自己以外のものを位置関係の中心に据えるときには，その物体の本質的部分 — 他人なら正面，時計なら文字盤，椅子なら坐る部分，家なら玄関のある部分など — との関係において位置関係を定めるという解釈の中に継続されており，物体が固有の方向性を持たない，すなわちどの部分がより本質的であるとも言えないときは，話者の視線のあたる部分との関係において，本質的部分を仮構するという認識パターンの中にまで延長されている。この意味で，位置関係は多かれ少なかれ指示詞 (deixis) の特性を持っている。

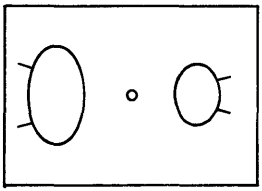
この考察より，前後関係という位置づけが，対人関係という経験に基礎づけられており，このパターンが完全，不完全の差はあれ，その位置づけの中に投写されているのが見てとれる。すなわち，一見物体間の相互的位置関係のように思われる関係も，実は，対人関係という生きられた経験の暗喩であるというのがその本質である。これはある物体が別の物体からどれだけの距離を置いて離れているかというような位置づけとは，経験の質において，根本的に異なる。そしてこの向き合った位置にあるということが，このように主観的要因に裏付けられた行為であってみれば，「ゴリオ爺さん」の終りで，Père-Lachaise の墓地から Paris の街に向かって挑戦をいどむ Rastignac が，世界に向かって立つ男というステレオタイプに裏付けられており，また顔をそむける行為が，その挑戦からの逃避を表わす最もありふれた言い方であったり，また，恋人同士が互いに見つめあう情景 ( ≪[...] Les mains dans les mains restons face à face / Tandis que sous / Le pont de nos bras passe / Des éternels regards l'onde si lasse ≫ Apolinaire, *Le Pont Mirabeau* ) が持っているなんとなく安全さを保証するような感じは，多かれ少なかれ，その位置付ける行為の中にみられる心理的要因が増幅されたものであることが納得されよう。

また，前後のような関係は，等しさ，大小関係と並んで，推移関係の代表的例のように思われ，それらの関係は，先天的知識の如く言われることもある。恐らく，等号や不等号に関しては反例を見つけることは不可能であると思われる。ところが，

前後関係では，十分反例を考えることができる。

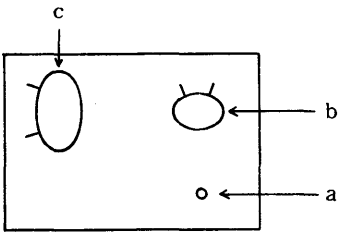
大きな眼覚し時計と，小さい眼覚し時計，及び糸巻を次の図のように並べると，

(20)




糸巻 a は，眼覚し時計 b の前にあり，眼覚し時計 b は，眼覚し時計 c の前にある。このときは，偶然，a は c の前にあるが，これは前という関係の論理的性質による結果ではない。また，次の図の場合は，

(21)

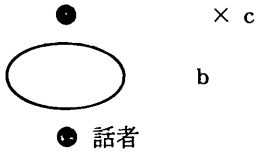



a は b の前にあり，b は c の前にあるが，a は c の前にあるともないとも言えない位置にある。結局のところ，われわれが「a は b の前にあり，b は c の前にある，ゆえに，a は c の前にある」などと言うときは，さまざまにありうる場合から，物体のもっている方向性や相対的大きさなどにより，われわれの認識パターンが異なることを考慮せずに，単純に一列に並んでいる三個の物体を思い浮かべているのに過ぎない。この種の思考は，抽象度が高いというより，むしろ「友達の友達は友達である」という推論と似たり寄ったりの杜撰な思考であろう。「a は b の前にあり，b は c の前にある」と言われたとき，われわれが一直線上にある三個の物体を考えるのは，ある意味では自然なことであるに違いない。しかし，典型的な配置から推論されうる結論と，その述語のもっている論理的特性を同一視することはできない。簡単に言えば，前後，左右関係それ自体は，論理的な関係ではなく，それが論理的

になるためには，補足的情報を必要とするということである。

また「aがbの後ろにある」という認識パターンと関係して，a，b及び話者が一直線上にある場合に，「aがbによって隠されている」「bがaを隠す」などにみられる「隠す」という動詞のもっている話者志向性が注目される。例えば，次の図のような場合，

(22)




話者のaへの視線がbによって遮ぎられており，話者にとっては，「bがaを隠している」という事態が成立するが，cの位置にある人からは，「bがaを隠している」とは言えない。このような認識パターンにも，世界が自分に対してもつ偶然的関係が，世界それ自身の性質のように見なす人間の自己中心的思考が見られる。これはまた「美しい」という概念によってとらえられるさまざまな物体が，その概念化から独立して，すなわち，物体それ自身の特性として美しさをもっており，物体間の差異，そしてそれに関連して起こる美しさの認識パターンの変化を無視して，「美しいもの」なる集合が与えられていると錯覚するのと類似している。

## 7. 結　　論

実験心理学において，first order isomorphism fallacy (FOIF) という思考の錯誤現象があることが指摘されている。FOIFとは，ある主体Aが，Bなるものを創り出し，BのうちにCなる構造が見られるとき，Aの能力中にCを創り出すようなメカニズムが必然的に存在していると結論する誤りである。例えば，ある種の羽蟻は，建築学上まことに見事な蟻塚を作る。その蟻塚と同じものを人間が造ろうとすれば，とてつもない複雑な建築学上の道具立てが必要になる。このとき，最も単純な仮説は，その羽蟻の一匹一匹が，そうした建築学上の知識を生得的，または後天的に習得しているとすることであろう。しかし，実際に羽蟻の行動を観察すると，その仮説は必要ないどころか誤りであることが証明されうる。蟻塚を作るに際して，

最初のうちは羽蟻は，唾液で丸めた土の固まりをまったくでたらめにあちこちに置く。すると次には，偶然にその固まりがたくさん置かれた場所にのみ集中して置くようになる。この羽蟻の唾液の中にはフエロモンという化学物質が含まれており，羽蟻は，このフエロモンの濃度が最高に達し，下降し始めるところに，土の固まりを置くわけである。すると後は全く機械的力学的法則により，この見事な蟻塚が出来上がる仕組になっている。すなわち，この羽蟻はフエロモンに反応するように条件付けられておれば，一切の建築学上の知識などなくとも，その蟻塚を立てることができるわけである。

このような事実は，言語を研究する場合に，ある言語的事実のなかに見られる構造的特性を，無批判に言語能力に帰する危険性に気付かせる。言語のさまざまなレベルにおいて観察されうる種々の特性のすべてが，言語能力自体の特性であると単純に結論することはできない。すなわち，言語能力自体がたとえ比較的単純な知識の総体であっても，人間のもつ一般的推論能力，言語外的知識その他の要因により，現象面では，類まれなる複雑な構造をもつ構成物となりうる可能性が十分にありうるということである。例えば，

(1) a. このシャープペンは書きやすい。
　　b.* このライターは書きやすい。
(2) ＊ この絵は毎日散歩する。
(3) ＊ 私は，明日，この机を買った。

などの (1b)，(2)，(3)にみられるある語同士の共起制限などが，これだけでは言語能力の直接の反映であると結論することはできないということになる。

また，第3章から第5章までで見たようなさまざまな度合において数個の解釈を許す文が，言語上の曖昧さではなく，言語の現象としては唯一のものであるところから，異なる解釈を見つけ出すことのできる推論の問題であるとするなら，そうした文の種々の意味に対応するだけの異なる深層構造を考えること自体の必然性がなくなってしまうことになる。同様に，一見多義的に見える単語や表現も，多くの場合，実は言語学的知識の上での多義性ではないであろうということにもなる。また，暗喩の本質が，既に理解されている領域の概念を使って，理解の難しい領域を概念化する思考力の過程であるという考察も，言語の意味の問題を再検討する手掛かりを与える。人間の言語能力が比較的単純なものであっても構わないし，また，文の

言語的レベルの意味が不完全であっても良いと考える前提には，言語能力が一応は閉じた全体を成すにもかかわらず，実際の使用においては，他の種々の能力と協調して働くその開かれた側面の理解がある。

言語の研究の最終的目標は，人間の思考作用の解明である。この前提のもとでも，さまざまな接近法がありうる。言語の社会的慣習としての側面を研究するのもその一つであり，言語の研究の不可欠な部分を成している。また，構造としての言語が使用される場合，そこに見られるある法則性に注目することもできる。この論文の最初の部分では，意味のレベルでは単一である文が，いくつかの異なる解釈と相入れうる現象の考察を通じて，言語行為が本質的に多声的であり，それはまた，ある対象に関して，さまざまな解釈体系が同時進行的に適用されるということであるのを見た。次いで第5章においては，ある語がその使用に際して，その語がもともと持ち得ないような意味で使われる現象の考察により，言語使用の換喩的側面を明らかにすると共に，多声的現象の根底にあるのは，この換喩であるのを見た。この考察の前提には，言語行為全体のなかでの意味の果す機能は，指令，合図，送り，ヒントのようなものであり，それ自体が完結している対象でもなければ，また，その必要もなく，文脈的知識，言語外的知識，一般的推論能力などに支えられて，始めて，その目的を達しうるという考えである。ある文が，その文脈から切り離された場合に，意味そのものはわかっても，何を言おうとしているのかわからなくなるというのも，この事実の一つのあらわれである。第6章においては，暗喩の本質は，既に理解された領域の概念による別の領域の概念化にあると捉えることにより，暗喩もまた，一つの解釈体系の選択であるのを見た。すなわち，ある領域の対象を暗喩によって構造化することは，その暗喩に内在している解釈体系としての機能を認めるということである。多声的現象が，同一の対象に対しての異なる解釈体系の併立，共存であるなら，暗喩は，異なる対象に対しての同一の解釈体系の適用であると言えよう。この点に，この論文でこの二つの事象を同時に扱った意義がある。

（注１）　これは，いわゆる「間接的発話行為」と呼ばれる現象である。この点に関する論文は数多あるが，比較的良く知られているのは次のものである。

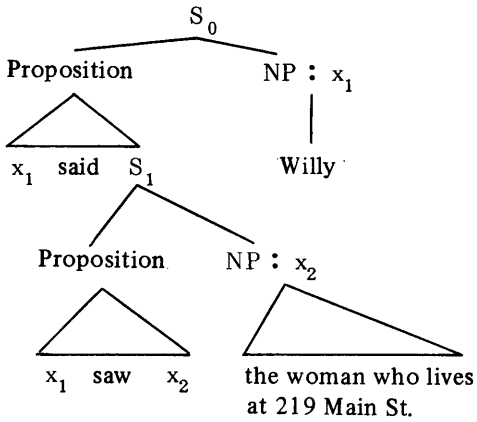
Searle, *Speech act: An essay in the philosophy of language,* Cambridge University Press, 1969.
——, *Indirect speech acts,* in *Cole-Morgan,* 1975.
Gordon, Lakoff, *Conversational postulates,* in *Cole-Morgan,* 1975.

また，次のものは前提の問題と関連して興味深い意見が見られる。

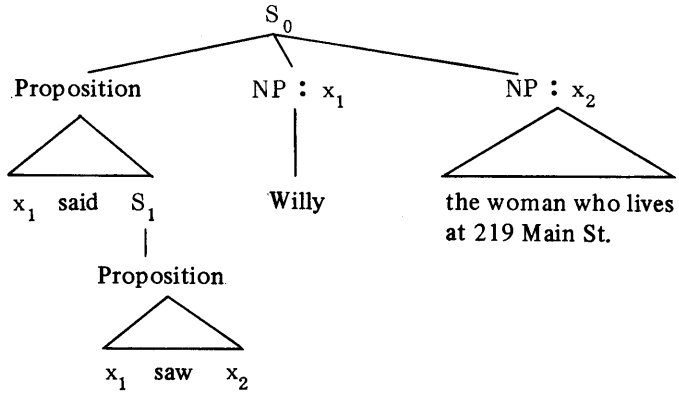
Ducrot, *Peésupposition et sous-entendu (réexamen),* in *Stratégies discursives,* Presses universitaires de Lyon, 1978.

（注２）　樹形図を用いて表わせば次のようになる。

(9a)



(9b)




（注３） 以下において使われる「現実」「現実世界」とは，単に像世界と関連する操作概念にすぎず，話者が前提している信念，知識，偏見の体系であったり，時間や空間が問題になるときは，話者と密接な関係にある特殊な時間や空間（発話の現在や話者が属しているグループなど）のことで，特別な形上而学的意味はない。また，時として，これは単に前提と言い換えられることもある。

（注４） 例文(4)からも明らかなように，このようなことは名詞句に限定されるわけでもなければ，またある特定の文法的カテゴリーに属する表現に限定されるわけでもない。例えば，ある会社において社長が業者との会合があると言って外出するときには，ゴルフをやりに行くというのが周知の事実であれば，社長の言葉を報告するのに，「社長はゴルフをやりに行くと言った」という文を使うことも考えうる。また本文中のような思い込みがあるときに，医者が診察すると言って出かけたのを，「彼は人殺しに行くと言った」と言い換えてしまうことも考えられる。

（注５） この種の換喩がある集団内部で永続的に容認されている場合には，それは容易にその集団内部での固定的慣習に属する綽名に変化しうる。例えば，Balzacを研究している人が「 Balzac 」になったり，ラーメンを食べる時にやたらと胡椒をかける人が「胡椒小僧」になったりするのはこの例である。

（注６） この指示関数がある限界内に制限されているのは容易に推察される。さ

もなければ，ある言語の名詞は一個あれば事足りるという極端な事態も可能になってしまう。（あるタイプの失語症においては，文脈から明白に推察しうる事物は，machin, chose のような意味の薄弱な語によって置き換えられ，また動詞は réalizer, faire に制限される傾向があり，このタイプの失語症が更に昂進すると，終いには代名詞しか残らなくなるという Jakobson の指摘がある。従って，名詞一個の言語はこのタイプの失語症の言語である。）指示関数の限界が，対象の識別の限界と密接な関係があるのは疑いを容れない。例えば，関数 f(a)＝bにおいて，a，bが同タイプの対象であるなら，これは言語の指示関数である可能性は極端に低い。また指示関数は複数個の指示対象が対応するときに，そのうちの少数のもの，そして理想的には1個のものを選択する機能を持っているが，同タイプの意味や指示対象については，この選別機能を発揮し得ない。「カツ丼が，金を払わずに逃げたぞ」(＝(4))では，カツ丼が逃げるわけがないので，カツ丼に関して，文脈は逃げるという行動が可能な対象を探すように命令する。このように異なるタイプの間では，指示関数 f(a)＝bは容易に機能し得る。これに反して，「太郎」から「太郎の兄」への関数を f とするなら，f は言語の指示関数ではない。なぜなら，太郎が容認される文脈は，そのまま太郎の兄も容認され，f のような関数があるなら，「太郎」と言ったときに「太郎」本人が問題になっているのか，「太郎の兄」が問題になっているのかは，文脈からは識別不可能である。

複合関数 g(f(a))＝b では事情は更に複雑であるが，一般的には制限は三重になると考えられる。f(a)＝cならば，複合関数 g(f(a))＝bは，次のように a から c を通り b に到る関数となる。

$$a \xrightarrow{f} c \xrightarrow{g} b$$

このとき，a，b，c はすべて異なるタイプの対象でなければならない。ところが(5)において，「Balzac」から「Balzac の本を買った人」への指示関数は，概略次のような複合関数として示せる。

$$\begin{array}{ccccc} \text{Balzac} & \xrightarrow{f} & \text{Balzac の本} & \xrightarrow{g} & \text{Balzac の本を買った人} \\ \Downarrow & & & & \Downarrow \\ \text{人間} & & & & \text{人間} \end{array}$$

とすると，最初と終わりが同タイプの複合関数のあるものは，言語の指示関数として機能し得るということになるのかも知れない。しかし，著作家を読者と同じタイプの人間というカテゴリーとして一括して扱う必要があるかどうかが問題にされよう。例えば，「私は Balzac を読んだ」の「 Balzac 」は Balzac が書いたものの一部しか指し得ず，Balzac が書いた手紙の意味としては不適切である。とするなら，著作家の名前が指示できる著作は，一般に作品と呼び得るものに限定されていると言える。とするなら，上の例での「 Balzac」は人間としての Balzac でなしに，著作家が問題になっており，結局複合関数への制限は満たされていると結論できる。

（注７） 言語が概念体系であり，その使用が根底において思考作用であるので，精神分析でいう転移，置換，圧縮などの相似物をもつのは容易に納得されよう。Benveniste は，*Remarques sur la fonction du langage dans la découverte freudienne* (in *Problèmes de linguistique générale 1*, Gallimard, 1966) において，言語が社会的慣習として習得せねばならない点において，夢や無意識のような象徴体系 — 特殊的，個人的である一方では，約束事から比較的自由であるために，社会的，文化的制約を受けず普遍的性格をもつ — と異なることを強調し，無意識の象徴作用は，言語の中にではなく，むしろ言語使用の中に，特に文体の技法，修辞学の文彩の中に相似物を見い出すと述べている。一方， Benveniste よりディスクールよりの立場を取る Jakobson は，換喩や暗喩がすべての象徴体系にみられる事実の方に興味の重点を置いている (La compétition entre les deux procédés, métonymiques et métaphorique, est manifeste dans tout le processus symbolique, qu'il soit intrasubjectif ou social. 上掲書 p. 65) 。 また，Todorov, *Théories du symbole*, Seuil, 1977 の中に，修辞学と Freud 理論の関係を論じた論文 *La rhétorique de Freud* がある。

（注８） 以下の解釈のもとになる実験は，関西大学大学院生岩崎淳子さんによって行なわれ，受身文 a と単なる位置関係を表わす文 b の差異を説明しようとする論文 *La marge de la syntaxe* を執筆中に思い起こし，ここに述べる解釈に到った。

a. Cette maison est cachée par un grand arbre.
b. Cette maison est cachée derrière un grand arbre.

また，この論文を書いている頃に，再帰代名詞のかなり沢山の用法が，心と身体の分離によって説明可能になりうるという仮説の証明に没頭していた友人 Samuel Silva との討論からもヒントを得ている。その後，不十分ながら，Lakoff, Johnson（上掲書）及び Miller, Johnson-Laird (*Language and Perception*, The Belknap Press of Harvard University Press, 1976) の中にも，同様な観察があるのがわかった。